

# 源氏物語

手習

紫式部

青空文庫



ほど近き法の御山をたのみたる女郎花  
（をみなへし）

かと思ゆるなりけれ  
（晶子）

そのころ比叡の横川に某僧都といつて人格の高い僧があつた。八十を越えた母と五十くらいの妹を持つていた。この親子の尼君が昔かけた願果たしに大和の初瀬へ参詣した。僧都は親しくてよい弟子としてゐる阿闍梨を付き添わせてやつたのであつて、仏像、経巻の供養を初瀬では行なわせた。そのほかにも功德のことを多くして帰る途中の奈良坂という山越えをしたころから大尼君のほうが病氣になつた。このままで京へまで伴つてはどんなことになるかもしれないと、一行の人々は心配して宇治の知つた人の家へ一日とまつて静養させることにしたが、容体が悪くなつていくようであつたから横川へしらせの使いを出した。僧都は今年じゆう山から降りないことを心に誓つていたのであつたが、老いた母を旅中で死なせることになつてはならぬと胸を騒がせてすぐに宇治へ来た。ほかから見ればもう惜しまれる年齢でもない尼君であるが、孝心深い僧都は自身もし、また弟子の中の祈祷の効験をよく現わす僧などにも命じていたこの客室での騒ぎを家主は聞き、その人

は御嶽参詣のために精進潔斎しやうじんけつさいをしているころであつたため、高齢の人が大病になつていてはいつ死穢しえの家になるかもしれないぬと不安がり、迷惑そうに蔭かげで言つてゐるのを聞き、道理なことであると気の毒に思われたし、またその家は狭く、座敷もきたないため、もう京へ伴つてもよいほどに病人はなつていたが、陰陽道おんようどうの神のために方角がふさがり、尼君たちの住居すまいのほうへは帰つて行かれぬので、お亡かくれになつた朱雀院の御領で、宇治の院いんもりという所はこの近くにあるはずだと僧都は思い出し、その院守を知つていたこの人は、一、二日宿泊をさせてほしいと頼みにやると、ちやうど昨日初瀬へ家族といつしよに行つたと言ひ、貧相な番人の翁おきなを使ひは伴つて歸つて来た。

「おいでになるのでございましてらがらつとしております寝殿をお使いになるほかはございませんでしよう。初瀬や奈良へおいでになる方はいつもそこへお泊まりになります」

と翁は言つた。

「それでけつこうだ。官有の邸やしきだけれどほかの人もいなくて気楽だろうから」

僧都はこう言つて、また弟子を檢分に出した。番人の翁はこうした旅人を迎えるのに馴なれていて、短時間に簡単な設備を済ませて迎えに来た。僧都は尼君たちよりも先に行った。非常に荒れていて恐ろしい気のする所であると僧都はあたりをながめて、

「坊様たち、お経を読め」

などと言っていた。初瀬へついで行った阿闍梨と、もう一人同じほどの僧が何を懸念したのか、下級僧にふさわしく強い恰好かっこうをした一人に炬火たいまつを持たせて、人もはいつて来ぬ所になつてゐる庭の後ろのほうを見まわりに行った。森かと思えるほど繁しげつた大木の下の所を、気味の悪い場所であると思つてながめてみると、そこに白いものの拡ひろがっているのが目にはいつた。あれは何であろうと立ちどまつて炬火を明るくさせて見ると、それはすわつた人の姿であつた。

「狐きつねが化けてゐるのだろうか。不届へんげな、正体を見あらわしてやろう」

と言つた一人の阿闍梨は少し白い物へ近づきかけた。

「およしなさい。悪いものですよ」

もう一人の阿闍梨はこう言つてとめながら、変化へんげを退ける指の印を組んでゐるのであつたが、さすがにそのほうを見入つてゐた。髪の毛がさかだつてしまふほどの恐怖の覚えられることでありながら、炬火を持った僧は無思慮に大胆さを見せ、近くへ行つてよく見ると、それは長くつやつやとした髪を持ち、大きい木の根の荒々しいのへ寄つてひどく泣いてゐる女なのであつた。

「珍しいことです。僧都様のお目にかけたい気がします」

「そう、不思議千萬なことだ」

と言い、一人の阿闍梨は師へ報告に行った。

「狐が人に化けることは昔から聞いているが、まだ自分は見たことがない」

こう言いながら僧都は庭へおりて来た。

尼君たちがこちらへ移つて来る用意に召使の男女がいろいろの物を運び込む騒ぎの済んだあとで、ただ四、五人だけがまた庭の怪しい物を見に出たが、さつき見たのと少しも変わっていない。怪しくてそのまま次の刻に移るまでもながめていた。

「早く夜が明けてしまえばいい。人か何かよく見きわめよう」

と言い、心で真言しんごんの頌じゆを読み、印を作っていたが、そのために明らかになつたか、僧

都は、

「これは人だ。決して怪しいものではない。そばへ寄つて聞いてみるがよい。死んではない。あるいはまた死んだ者を捨てたのが蘇生そせいしたのかもしれない」

と言つた。

「そんなことはないでしょう。この院の中へ死人を人の捨てたりすることはできないこと

でございます。真実の人間でございますも、狐とか木精こだまとかいうものが誘拐ゆうかいしてつれて来たのでしよう。かわいいそうなことでございます。そうした魔物の住む所なのでございましょう」

と一人の阿闍梨は言い、番人の翁を呼ぼうとすると山響やまびこの答えるのも無気味であった。翁は変な恰好かっこうをし、顔をつき出すふうにして出て来た。

「ここに若い女の方が住んでおられるのですか。こんなことが起こっているが」と言つて、見ると、

「狐の業わざですよ。この木の下でときどき奇態なことをして見せます。一昨年おとしの秋もここに住んでおります人の子供の二歳ふたつになりましたのを取つて来てここへ捨ててありましたが、私どもは馴なれていまして格別驚きもしませんじやった」

「その子供は死んでしまったのか」

「いいえ、生き返りました。狐はそうした人騒がせはしますが無力なものでさあ」  
なんでもなく思うらしい。

「夜ふけに召し上がりましたものにおいを嗅かいで出て来たのでしよう」

「ではそんなものの仕事かもしれん。まあとつくと見るがいい」

僧都は弟子たちにこう命じた。初めから怖氣おしげを見せなかつた僧がそばへ寄つて行つた。

「幽鬼おにか、神か、狐か、木精こだまか、高僧のおいでになる前で正体を隠すことはできないはずだ、名を言つてごらん、名を」

と言つて着物の端を手で引くと、その者は顔を襟えりに引き入れてますます泣く。

「聞き分けのない幽鬼おにだ。顔を隠そうたつて隠せるか」

こう言いながら顔を見ようとするのであつたが、心では昔話にあるような目も鼻もない女鬼めおにかもしれぬと恐ろしいのを、勇敢さを人に知らせたい欲望から、着物を引いて脱がせようとする、その者はうつ伏しになつて、声もたつほど泣く。何にもせよこんな不思議な現われは世にないことであるから、どうなるかを最後まで見ようと皆の思っているうちに雨になり、次第に強い降りになつてきそうであつた。

「このまま置けば死にましよう。垣根かきねの所へまでも出ましよう」と一人が言う。

「真の人間の姿だ。人間の命のそこなわれるのがわかつていながら捨てておくのは悲しいことだ。池の魚、山の鹿しかでも人に捕えられて死にかかつているのを助けなくておくのは非常に悲しいことなのだから、人間の命は短いものなのだからね、一日だつて保てる命なら、

それだけでも保たせないではならない。鬼か神に魅入られても、また人に置き捨てにされ、悪だくみなどでこうした目にあうことになった人でも、それは天命で死ぬのではない、横死うしをすることになるのだから、御仏みほとけは必ずお救いになるはずのものなのだ。生きうるか、どうかもう少し手当をして湯を飲ませなどもして試みてみよう。それでも死ねばしかたがないだけだ」

と僧都そうずは言い、その強がりの僧に抱かせて家の中へ運ばせるのを、弟子たちの中に、「よけいなことだがなあ。重い病人のおられる所へ、えたいの知れないものをつれて行くのでは穢けがれが生じて結果はおもしろくないことになるがなあ」

と非難する者もあつた。また、

「変化へんげのものであるにせよ、みすみすまだ生きている人をこんな大雨に打たせて死なせてしまうのはあわれむべきことだから」

こう言う者もあつた。下の者しもは物をおおぎように言いふらすものであるからと思ひ、あまり人の寄つて来ない陰のほうの座敷へ拾つた人を寝させた。

尼君たちの車が着き、大尼君がおろされる時に苦しがると言つて皆は騒いだ。

少し静まつてから僧都は弟子に、

「あの婦人はどうなったか」

と問うた。

「なよなよとしてしましてもものも申しません。確かによみがえったとも思われません。何かに魂を取られていいる人なのでしよう」

こう答えているのを僧都の妹の尼君が聞いて、

「何でございますの」

と尋ねた。こんなことがあつたのだと僧都は語り、

「自分は六十何年生きているがまだ見たこともないことにあつた」

と云うのを聞いて、尼君は、

「まあ、私が初瀬はせでお籠りこもをしている時に見た夢があつたのですよ。どんな人なのでしよう、ともかく見せてください」

泣きながら尼君は云うのであつた。

「すぐその遣戸やりどの向こう側に置きましたよ。すぐ御覧なさい」

兄の言葉を聞いて尼君は急いでそのほうへ行つた。だれもそばにせず打ちやられてあつた人は若くて美しく、白い綾あやの服一重ねを着て、紅はかまの袴はかまをはいていた。薫香くんこうのにおいが

かんばしくついていてかぎりもなく気品が高い。自分の恋い悲しんでいる死んだ娘が帰つて来たのであろうと尼君は言い、女房をやつて自身の室へ抱き入れさせた。発見された場所がどんな無気味なものであつたかを知らない女たちは、恐ろしいとも思わずそれをしたのである。生きているようでもないが、さすがに目をほのかにあげて見上げた時、

「何かおっしゃいよ。どんなことでこんなふうになつていらつしやるのですか」

と尼君は言つてみたが、依然失心状態が続く。湯を持つて来させて自身から口へ注ぎ入れなどするが、衰弱は加わつていくばかりと見えた。

「この人を拾うことができ、そしてまた死なせてしまう悲しみを味わわなければならぬだろうか」

と尼君は言い、

「この人は死にそうですよ。加持をしてください」

と初瀬へ行つた阿闍梨あじやりへ頼んだ。

「だからむだな世話焼きをされるものだと言つたことだつた」

この人はつぶやいたが、憑つきもののために経を読んで祈つていた。僧都もそこへちよつと来て、

「どうかね。何がこうさせたかをよく物怪もののけを懲らして言わせるがよい」

と言つていたが、女は弱々しく今にも消えていく命のように見えた。

「むずかしいらしい。思いがけぬ死穢しえに触れることになって、われわれはここから出られなくなるだろうし、身分のある人らしく思われるから、死んでもそのまま捨てることはならないだろう。困ったことにかかり合ったものだ」

弟子たちはこんなことを言っているのである。

「まあ静かにしてください。人にこの人のことは言わないでくださいよ。めんどろが起るといけませんから」

と口固めをしておいて、尼君は親の病よりもこの人をどんなにしても生かしたいということで夢中になり、親身の者のようにじつと添つていた。知らない人であつたが、容貌ようぼうが非常に美しい人であつたから、このまま死なせたくないと思ひ、どの女房も皆よく世話をした。さすがにときどきは目をあけて見上げなどするが、いつも涙を流しているのを見て、

「まあ悲しい。私の恋しい死んだ子の代わりに仏様が私の所へ導いて来てくださつた方だと思つて私は喜んでますのに、このままになつてはかえつて以前にました物思ひをする私

になるでしょう。宿縁があればこそこうして出逢うことになったあなたと私に違いないのですよ。なんとか少しでもものをお言いなさいよ」

こう長々と言われたあとで、やつと、

「生きることができなくても、私はもうこの世にいらない人間でございます。人に見せないでこの川へ落としてしまってください」

低い声で病人は言った。何にもせよ珍しくものを言いだしたことをうれしく尼君は思った。

「悲しいことを、まあどうしてそんなことをお言いになりますの、どうしてそんな所に来ておいでになったの」

と尋ねても、もうそれきり何も言わなかった。身体からだにひよつと傷でもできていないかと思つて調べてみたが、疵きずらしい疵もなく、ただ美しいばかりであつたから、心は驚きに満たされ、さらに悲しみを覚え、實際兄の弟子たちの言うように、変化へんげのものであつてしばらく人の心を乱そうがためにこんな姿で現われたのではないかと疑われもした。

一行は二日ほどここに滞留していて、老尼と拾つた若い貴女きしよのために祈りをし、加持をする声が絶え間もなく聞こえていた。宇治の村の人で、僧都に以前仕えたことのあつた男

が、宇治の院に僧都が泊まっていると聞いて訪ねて来ていろいろと話をするのを聞いていると、

「以前の八の宮様の姫君で、右大将が通つて来ておいでになった方が、たいした御病気で、もなしにわかにお亡れかくになったといつてこの辺では騒ぎになっております。そのお葬式のお手つだいに行つたりしたものですから昨日は何うことができませんでした」

こんなことも言っている。そうした貴女の靈魂を鬼が奪つて持つて来たのがこの人ではあるまいかと思われた尼君は、今は目に見えているが跡形もなく消えてしまう人のように思われ、危うくも恐ろしくも拾つた姫君を思つた。女房らが、

「昨夜ここから見えた灯ひはそんな大きい野べ送りの灯とも見えなんだけれど」  
と言うと、

「わざわざ簡単になすつたのですよ」

こんな説明をした。死穢に触れた男であるから病人の家に近づかせてはならないと言ひ、立ち話をさせただけで追り返した。

「大將さんが八の宮の姫君を奥様にしていらつしやつたのは、お亡なくなりになってもうだ**いぶ**時がたつてのことだのに、だれのことをいうのだろう。姫宮と結婚をしておいでに

なる方だから、そんな隠れた愛人などをお持ちになるはずもないことだし」

とも尼君は言っていた。

大尼君の病気は癒えてしまった。それに方角の障りさわもなくなくなったことであるから、こうした怪異めいたことを見る所に長くいるのはよろしくないといって、僧都の一行は帰ることになった。拾った貴女はまだ弱々しく見えた。途中が心配である、いたいたしいことであると女房たちは言い合っていた。二つの車の一台の僧都と大尼君の乗ったのにはその人に奉仕している尼が二人乗り、次の車には尼夫人が病の人を自身とともに乗せ、ほかに一人の女房を乗せて出た。車をやり通させずに所々でとめて病人に湯を飲ませたりした。比叡ひゑの坂さかもと本の小野という所にこの尼君たちの家はあった。そこへの道程みちのりは長かった。途中で休息する所を考慮しておけばよかつたと言いながらも小野の家へ夜ふけになって帰り着いた。僧都は母を、尼君はこの知らぬ人を世話して皆抱きおろして休ませた。

老いた尼君はいつもすぐれた健康を持つているのではない上、遠い旅をしたあとであったから、その後しばらくはわずらっていたもののようにやく快癒かいゆしたふうの見たため僧都は横川よかわの寺へ帰った。身もとの知れない若い女の病人を伴って来たというようなことは僧としてよい噂うわさにならぬことであつたから、初めから知らぬ人には何も話さなかつた。尼

君もまた同行した人たちに口固めをしているのであって、もし捜しに来る人もあつたならばと思うことがこの人を不安にしていた。どうしてあの田舎人ばかりのいる所にこの人がこぼされたように落ちていたのであろう、初瀬へでも参詣さんけいした人が途中で病気になつたのを継母まははなどという人が悪意で捨てさせたのであろうと、このごろではそんな想像をするようになった。河かわへ流してほしいと言つた一言以外にまだ今まで何も言わないのであつたからたよりなく思つた。そのうち健康じょうぶにさせて手もとで養うことにしたいと尼君は願つていたのであるが、いつまでも寝たままで起き上がれそうにもなく、重態な様子でその人はいたから、このまま衰弱して死んでしまふのではなからうかと思われはするものの無関心にはなれそうもなかつた。初瀬で見た夢の話もして、宇治で初めから祈きとうらせていた阿闍梨にも尼君はそつと祈きとうをさせていた。それでもはかばかしくなくことに気をもんで尼君は僧都の所へ手紙を書いた。

ぜひ下山してくださいまして私の病人を助けてくださいまし。重態なようではしかも今日まで死なずにいることのできた人には、何かがきつと憑ついていて禍わざわいをしてはいるものらしく思われます。私の仏のお兄様、京へまでお出になるのはよろしくないかもしれませんが、ここへまでおいでくださるだけのことはお籠こもりに障さわることでもないではございま

せんか。

などと、切な願いを言い続けたものであった。不思議なことである、今までまだ死なずにおられた人を、あの時うちやつておけばむろん死んだに違いない、前生の因縁があつたからこそ、自分が見つけることにもなつたのであろう、試みにどこまでも助けることに骨を折ってみよう、それでとめられない命であつたなら、その人の業が尽きたのだとあきらめてしまおうと僧都は思つて山をおりた。

うれしく思つた尼君は僧都を拝みながら今までの経過を話した。

「こんな長わづらいをする人というものはどこかしら病人らしい気味悪さが自然にでてくるものですが、そんなことはないのでございますよ。少しも衰えたふうはなくて、きれいで清らかなのですよ。そうした人ですから危篤にも見えながら生きられるのでしようね」  
尼君は真心から病人を愛して泣く泣く言うのであつた。

「はじめ見た時から珍しい美貌びぼうの人だつたね。どんなふうでいます」

と言ひ、僧都は病室をのぞいた。

「實際この人はすぐれた麗人だね。前生での功德くどくの報いでこうした容姿を得て生まれたのだらうが、また宿命の中にどんな障さわりがあつてこんな目になつたのだらう。何

かほかから思いあたるような話を聞きましたか」

「少しもございません。そんなことを考える必要はないと思います。私へ初瀬はせの観音様がくだすった人ですもの」

と尼君は言う。

「それにはその順序がありますよ。虚無から人の出てくるものではないからね」

などと僧そうず達は言い、不思議な女性のために修法を始めた。宮中からのお召しさえ辞退して山にこもっている自分が、だれとも知らぬ女のために自身で祈祷きとうをしていることが評判になつては困ることであると僧そうずとも思い、弟子たちも言つて、修法の声を人に聞かすまいと隠すようにした。いろいろと非難がましく言う弟子たちに僧そうず達は、

「静かにするがよい。自分は無慚むざんの僧で、御みほとけ仏の戒めを知らず知らず破つていたことも多かつたであろうが、女に關することだけではまだ人の譏そしりを受けず、みずから認める過失はなかつた。年六十を過ぎた今になつて世の非難を受けてもしかたのないことに関与するの、前生からの約束事だろう」

と言つた。

「悪口好きな人たちに悪く解釈され、評判が立ちますればそれが根本の仏法の疵きずになるこ

とでございましょう」

快く思っていない弟子はこんな答えをした。自分のする修法の間に効験のない場合にはと非常な決心までもして夜明けまで続けた加持のあとで、他の人に物怪もののけを移し、どんなものがこうまで人を苦しめるかと話をさせるため、弟子の阿闍梨あじやりがとりどりにまた加持をした。そうしていると先月以来少しも現われて来なかった物怪が法に懲らされてものを言いだした。

「自分はここへまで来て、こんなに懲らされるはずの者ではない。生きている時にはよく仏の勤めをした僧であったが、少しの憾うらみをこの世に遺のこしたために、成仏ができずさまよひ歩くうちに、美しい人の幾人もいる所へ住みつくことになり、一人は死なせてしまったが、この人は自身から人生を恨んで、どうしても死にたいということを夜昼言っていたから、自分の近づくのに都合がよくて、暗い晩に一人でいたのを取って来たのだ。けれども観音がいろいろにして守っておられるため、とうとうこの僧都に負けてしまった。もう帰る」

叫ぶようにこれは言われたのである。

「そう言う者はだれか」

と問うたが、移してあつた人が単純な者でわきまへの少なかつたせいか、それをつまびらかに言うことをなしえなかつた。

浮舟うきふねの姫君はこの時気分が癒なほり、意識が少し確かになつて見まわすと、一人として知つた顔はなく、皆老いた僧、顔のゆがんだ尼たちだけであつたから、未知の国へ来た氣がして非常に悲しくなつた。以前のことを思い出そうとするが、どこに住んでいたとも、何という人で自分があつたかということすらしかと記憶から呼び出すことができないのであつた。ただ自分は入水しゆすいする決心をして身を投げに行つたということが意識に上つてきた。そしてどこへ来たのであろうとしいて過去を思い出してみると、生きていることがもう堪えがたく悲しいことに思われて、家の人の寝たあとで妻戸をあけて外へ出てみると、風が強く吹いていて川波の音響も荒かつたため、一人であることが恐ろしくなり、前後も考え見ず縁側から足を下へおろしたが、どちらへ向いて行つてよいかもわからず、今さら家の中へ帰つて行くこともできず、氣強く自殺を思い立ちながら、人に見つけられるような恥にあうよりは鬼でも何でも自分を食べて死なせてほしいと口で言いながらそのままじつと縁側によりかかつていた所へ、きれいな男が出て来て、「さあおいでなさい私の所へ」と言い、抱いて行く氣のしたのを、宮様と申した方がされることと自分は思ったが、その

まま失心したもののようであった。知らぬ所へ自分をすわらせてその男は消えてしまったのを見て、自分はこんなことになって、目的とした自殺も遂げられなかったと思い、ひどく泣いていたと思うがそれからのことは何も記憶にない。今人々の語っているのを聞くとそれから多くの日があったようである。どんなに醜態を人の前にさらした自分で、どんなに知らぬ人の介抱かいほうを受けてきたのかと思うと恥ずかしく、そしてしまいには今のようそせいに蘇生そせいをしてしまったのであると思われるのが残念で、かえって失心状態であった今日までは意識してではなくものもときどきは食べてきた浮舟の姫君であったが、今は少しの湯さえ飲もうとしない。

「どうしてそんなにたよりないふうをばかりお見せになりますか。もうずっと発熱することもなくなつて、病苦はあなたから去つたように見えるのを私は喜んでいきますのに」

こう言つて、尼夫人という緊張した看病人がそばを離れず世話をしていた。他の女房たちも惜しい美貌びぼうの浮舟の君の恢復かいふくを祈つて皆真心を尽くして世話をした。浮舟の心では今もどうかして死にたいと願うのであつたが、あのあぶない時にすら助かつた人の命であつたから、望んでいる死は近寄つて来ず、恢復のほうへこの人は運ばれていった。ようやく頭を上げることができるようになり、食事もするようになったころにかえつて重い病中

よりも顔の瘦せが見えてきた。この人の命を取りとめえたことがうれしく、そのうち健康体になるであろうと尼君は喜んでいるのに、

「尼にしてくださいませ、そうなつてしまえば生きてもよいという気になれるでしょうか」

「と言、浮舟は出家を望んだ。」

「いたいたしいあなたをどうしてそんなことにされますか」

と尼君は言い、頭の頂の髪少しを切り、五戒だけを受けさせた。それだけで安心はできないのであるが、賢しげにしいてそれを実現させてくれとも言えなかつた。山の僧都は、「もう大丈夫です。このくらいのところまで快癒を御仏におすがりすることはやめたらいいでしょう」

と言、残して寺へ帰った。

予期もせぬ夢のような人が現われたものであるというように尼君は恢復期の浮舟を喜んで、しいて勧めて起こし、髪を自身で梳いてやつた。長い病中打ちやられてあつた髪であるが、はなはだしくは乱れていないで、まもなく纏れもほぐれて梳きおろされてしまふと、つやつやと光沢が出てきれいに見えた。「百年に一とせ足らぬ九十九髪」といふような

人たちの中へ、目もくらむような美しい天女が降つて来たように見えるのも、跡なくかき消される姿ではないかという危うさを尼君に覚えさせることになった。

「なぜあなたに人情がわからないのでしよう。私がどんなにあなたを愛しているかしのいに、物隠しをしてばかりおいでになりますね。どこの何という家の方で、なぜ宇治と  
 というような所へ来ておいでになりましたの」

尼君から熱心に聞かれて浮舟の姫君は恥ずかしく思った。

「重くわずらつておりましたうちに皆忘れてしまつたのでしようか、どんなふうにとどこにいたかを少しも覚えていないのですよ。ただね、私は夕方ごとに庭へ近い所に出て寂しい景色をながめていたらしゆうごぎいます。そんな時に近くにあつた大木の蔭から人が出て来まして私をつれて行つたという気がします。それ以外のことは自分ながらも、だれであるかも思い出されないのですよ」

と姫君は可憐なふうで言い、

「私がまだ生きているということをだれにも知られたくないと思います。それを人が知つてしまつては悲しゆうごぎいます」

と告げて泣いた。あまり聞かれるのが苦しいふうであつたから尼君はそれ以上を尋ねよ

うとしなかつた。かぐや姫を竹の中に見つけた翁おきなよりも貴重な発見をしたように思われるこの人は、どんな隙すきから消えていくかもしれぬということが不安に思われてならぬ尼夫人であつた。この家の人も貴族であつた。若いほうの尼君は高級官吏の妻であつたが、良人おととに死に別れたあとで、一人よりない娘を大事に育てていて、よい公きん達だちを婿にすることができ、その世話を楽しんでしていたのであるが、娘は病になつて死んだ。それを非常に悲しみ尼になつてこの山里へ移つて来たのである。忘れる時もなく恋しい娘の形見とも思ふことのできる人を見つけないとつれづれなあまりに願つていた人が、意外な、容貌ようぼうも様子も死んだ子にまさつた姫君を拾いえたのであつたから、現実のことともこれを思ふことができず、変わりなしにこの幸福の続いていくかどうかをあやぶみながらもうれしく思つている尼君であつた。年はいつているがきれいで、品がよく、身のとりなしにも気高けだかいところがあつた。ここは浮舟のいた宇治の山莊よりは水の音も静かで優しかった。庭の作りも雅味があつて、木の姿が皆よく、前の植え込みの灌かん木ぼくや草も上手じょうずに作られてあつた。

秋になると空の色も人の哀愁をそそるようになり、門前の田は稲を刈るころになつて、田舎いなからしい催し事をし、若い女は唄うたを高声に歌つてはうれしがつていた。引かれる鳴子の音もおもしろくて浮舟は常陸ひたちに住んだ秋が思い出されるのであつた。同じ小野ではあるが

夕霧の御息所みやすどころのいた山莊などよりも奥で、山によりかかった家であったから、松影が深く庭に落ち、風の音も心細い思いをさせる所で、つれづれになつてはだれも勤行ばかりをする仏前の声が寂しく心をぬらした。尼君は月の明るい夜などに琴を弾ひいた。少将の尼という人は琵琶びわを弾いて相手を勤めていた。

「音楽をなさいますか。でなくては退屈でしょう」

と尼君は姫君に言つていた。昔も母の行く国々へつれまわられていて、静かにそうしたものの稽古けいこをする間もなかつた自分は風雅なことの端も知らないで人となつた、こんな年のいった人たちさえ音楽の道を楽しんでいるのを見るおりおりうきふねに浮舟の姫君はあわれな過去の自身が思い出されるのであつた。そして何の信念も持ちえなかつた自分であつたとはかなまれて、手習いに、

身を投げし涙の川の早き瀬にしがらみかけてたれかとどめし

こんな歌を書いていた。よいことの拾い出せない過去から思えば将来も同じ薄命道を続けて歩んで行くだけであろうと自身がうとましくさえなつた。

月の明るい夜ごとに老いた女たちは氣どつた歌を詠よんだり、昔の思い出話をするのであったが、その中へ混じりえない浮舟の姫君はただつくづくと物思いをして、

われかくて浮き世の中にめぐるともたれかは知らん月の都に

こんな歌も詠まれた。自殺を決意した時には、もう一度逢いたく思った人も多かつたが、他の人々のことはそう思い出されもしない。母がどんなに悲しんだことであろう。乳母めのとがどうかして自分に人並みの幸福を得させたいとあせっていたかしの成り行きを見て、さぞ落胆をしたことであろう、今はどこにいるだろう、自分がまだ生きていると知りえようはずがない、気の合った人もないままに、主従とはいえ隔てのない友情を持ち合つたあの右近うごんのこともおりおりは思い出される浮舟であつた。若い女がこうした山の家に世の中をあきらめて暮らすことは不可能なことであつたから、そうした女房はいず、長く使われている尼姿の七、八人だけが常の女房であつた。その人たちの娘とか孫とかいう人らで、京で宮仕えをしているのも、また普通の家庭にいるのも時々出て来ることがあつた。そうした人が宇治時代の関係者の所へ出入りすることもあつて、自分の生きていることが

宮にも大将にも知れることになったならきわめて恥ずかしいことである、ここへ来た経路についてどんな悪い想像をされるかもしれない、過去において正しく踏みえた人の道ではなかつたのであるからと思う羞恥心から、姫君は京の人たちには決して姿を見せることをしなかつた。尼君は侍従という女房とこもきという童女を姫君付きにしてあつた。容貌も性質も昔日の都の女たちにくらべがたいものであつた。何につけても人の世とは別な世界というものはこれであろうと思われる。こんなふうの人に人にかくれてばかりいる浮舟を、この人の言うとおりにめんどろなつなかりを世間に持つていて、それからのがれたい理由が何ぞあるのであろうと尼君も今では思うようになつて、くわしいことは家の人々にも知らせないように努めていた。

尼君の昔の婿は現在では中將になつていた。弟の禪師が僧都の弟子になつて山にこもつてゐるのを訪ねに兄たちはよく寺へ上つた。横川へ行く道にあたつてゐるために中將はときどき小野の尼君を訪ねに寄つた。前払いの音が聞こえ、品のよい男が門をはいつて来るのを、家からながめて浮舟の姫君は、いつでも目だたぬふうにしてあの宇治の山荘へ来た薫の幻影をさやかに見た。心細い家ではあるが住みなれた人は満足して、きれいにあたりが作つてあつて、垣に植えた撫子も形よく、女郎花、桔梗などの咲きそめた植え込

みの庭へいろいろの狩かりぎぬ衣姿をした若い男たちが付き添い、中將も同じ装束ではいつて来たのであった。

南向きの座敷へ席が設けられたのでそこへすわり、沈んだふうを見せてその辺を見まわしていた。年は二十七、八で、整った男盛りと見え、あさはかでなく見せたい様子を作っていた。尼君は隣室の襖からかみ子の口へまで来て対談した。少し泣いたあとで、

「過ぎた月日の長くなりましたことで、あの時代といえますものが遠い世のような気がいたされながら、おいでくださいますのを山里に添えられる光明のように思われまして、今でもあなたをお待ちすることが心から離れませんのを不思議に思っております」

と云うのを聞いて、中將は湿った気持ちになり、

「昔のことの思われない時もないのですが、世の中から離脱したことを標ひょうぼう榜ぼうしておいでになるような今の御生活に對して、古いことにとらわれている自分が恥ずかしくつて、お訪ねいたすのも怠りがちになってしまいました。山ごもりをしている弟もまたうらやましくなり、僧都そうずのお寺へはよくまいるのですが、ぜひ同行したいという人が多いものですから、お寄りするのを妨げられる結果になりました、失礼もしましたが、今日は都合よくその連中を断わって来ました」

と言つていた。

「山ごもりをおうらみになつたりしては、かえつて近ごろの流行かぶれに思われますよ。昔をお忘れにならないお志は現代の風潮と変わったあたりがたいことと、お噂うわさを聞いて思うことが多うございます」

などと言うのは尼君であつた。ついて来た人々に水飯すいはんが饗きよう応おうされ、中將には蓮はすの実などを出した。そんな間食をしたりすることもここでは遠慮なくできる中將であつたら、おりから俄にわか雨あめの降り出したのにも出かけるのをとめられて尼君となおもしみじみとした話をかわしていた。娘を失つたことよりも情のこまやかであつたこの婿君を家の人でなくしてしまったことが、より以上尼君に悲痛なことであつて、娘はなぜ忘れ形見でも残していかなかつたかとそれを歎なげいている心から、たまさかにこうして中將の訪問を受けるのは非常な悦よろこびであつたから、大事な秘密としてあることもつい口へ出てしまうことになりそうであつた。

浮舟の姫君は昔について尼君とは異なつた悲しみを多く覚え、庭のほうをながめ入つてゐる顔が非常に美しい。同じ白といつてもただ白い一方でしかない、目に情けなく見える単衣ひとえに、袴はかまも檜皮色ひはだの尼の袴を作りなれたせいか黒ずんだ赤のを着けさせられていて、こ

んな物も昔着た物に似たところのないものであると姫君は思いながら、そのこわごわとしたのをそのまま着た姿もこの人だけには美しい感じに受け取れた。女房たちが、

「このごろはお亡れかくになつた姫君が帰つておいでになつた気がしているのに、中将様さえも来ておいでになつてはいよいよその時代が今であるような錯覚が起こりますね。できるならば昔どおりにこの姫君と御夫婦におさせしたい、よくお似合いになるお二人でしょう」

こんなことを言っているのも浮舟の耳にはいった。思いも寄らぬことである、普通の女の生活に帰つて、どんな人にもせよ結婚をすることなどはしようと思わない、それによつて自分はただ昔を思うばかりの人になるであろうから、もうそうした身の上には絶対になるまい、そして昔を忘れたいと浮舟の姫君は思った。

尼君が内へ引つ込んだあとで、中将は降りやまぬ雨をながめることに退屈を覚え、少将といった人の声に聞き覚えがあつてそばへ呼び寄せた。

「昔のなじみの人たちは今も皆ここにおられるのであろうかと、思つてみる時があつても、こうした御訪問も自然できなくなつてしまつている私を、薄情なようにも皆さんは思つておられるでしょう」

こんなことを中将は言った。親しく中将にも仕えていた女房であつたから、昔の妻につ

いての思い出話をしたあとで、

「私がさつき廊の端を通ったところに、風がひどく吹いていて、簾すだれが騒さわがしく動く紛まれに、その合あい間から、普通の女房とは思われない人の後ろへ引いた髪が見えたから、尼様たちのお住居すまいにだれが来ておられるのかと驚おどろきましたよ」

と中将が言いだした。姫君が立つて隣室へお行きになつた後ろ姿を見たのであろうと少将は思い、まして細かに見せたなら多大に心の惹ひかれることであろう、あの方に比べれば昔の方はずっと劣つておいでになつたのであるが、まだ忘れぬように恋しがっている人であるからと少将は心に思い、ひとり決めではなやかに事の発展していくことを予期して、「お亡かくれになつた姫君のことがお忘れになれませんか困つていらつしやいます時に、思いがけぬ姫君をお見つけになりました、今では明け暮れの慰めにして奥様がお世話をしておいでになるのですが、そのお姿を不思議にお目におとめになりましたのでございますね」

こう語つた。そんなおもしろい事実があつたのかと興味のわいてきた中将は、どうした家の娘であろう、それとなく今少将が言うとおりに美しい人らしくほのかに見ただけの人からかえつて深い印象の与えられたのを中将は感じた。くわしく聞こうとするのであるが、少将は事実をそのまま告げようとはせずに、

「そのうちおわかりになるでしょう」

とだけ言っているのに対して、にわかには質問をしつこくするのも恥ずかしくなり、従者が、

「雨もやみました。日が暮れるでしょうから」

と促す声のままに中将は出かけようとするのであった。縁側を少し離れた所に咲いた女みなえし郎花を手に折って「何にほふらん」（女郎花人のもの言ひさがにくき世に）と口ずさんで立っていた。

「人から何とか言われるのをさすがに恐れておいでになるのですね」

などと古めかしい人らはそれをほめていた。

「ますますきれいにおなりになつてりっぱだね。できることなら昔どおりの間柄になつてつきあいたい」

と尼君も言っているのであった。

「藤中納言のお家うちへは始終通つておいでになると見せておいでになつて、気に入った奥さんでないらしくてね、お父様のお邸やしきに暮らしておいでになることのほうが多いということだね」

こんな話も女房相手にしてから、浮舟へ、

「あなたはまだ私に隔て心を持つておいでになるのが恨めしくてなりませんよ。もう何事も宿命によるのだとあきらめておしまいになって、晴れ晴れしくなってくださいよ。この五、六年片時も忘れることができなくて悲しい悲しいと思つていた人のことも、あなたという方をそばで見るとなつてからは忘れてしまいましたよ私は。あなたをお愛しになつた方がたがこの世においでになつても、もうあなたはお亡なくなりになつたものと今ではあきらめておいでになりましたよ。何のことだつてその当時ほどに人は思わないものですからね」

と云うのを聞くうちにも姫君は涙ぐまれてくるのであつた。

「私は何も隔てをお置きする気などはないのですけれども、不思議な蘇そせい生をしましてからは、何も皆夢のようにしか思い出せなくなつていまして、別の世界へ生まれた人はこんな気がするものであらうと感ぜられますから、身寄りというものがこの世にまだあるとも、思つていません私は、あなたの愛だけを頼みにしているのでございます」

と云う浮舟うきふねの顔に純真さが見えてかわいいのを尼君は笑えみながら見守つていた。

山の寺へ着いた中将を僧都も喜んで迎え、いろいろと世上の話を聞いたりした。その夜

は宿泊することにして尊い声の出る僧たちに経を読ませて遊び明かした。弟の禪師とこまやかな話をしていっているうちに中将は、

「小野へ寄つて来たがね、身にしむ思いを味わわせられた。出家したあとまであれだけ高雅な趣味のある生活のできる人は少ないだろうね」

こんなことを言い、続いて、

「風が御簾を吹き上げた時に、髪の毛長い美しい人を見た。あらわになったと気のついたように立つて行つたが、後ろ姿が平凡な人とは見えなかった。ああした所に若い貴女などは置いていいものでないね。明け暮れ見る人といつては坊様だけだから、のぞく者がないかと使う神経が弛緩してしまふからね、気の毒だよ」

こんな話をした。

「この春初瀬へ詣つて不思議な縁でおつれになった若いお嬢さんだということですよ」

禪師は自身の携わつた事件でなく知るはずもなかったから細かには言わない。

「かわいそうな人なのだね、どんな家の人だろう。世の中が悲しくなつたればこそそうした寺へ来て隠れていたのだろうからね。昔の小説の中のことのようだ」

と中将は言つた。

翌日山からの帰途にもまた、

「通り過ぎることができぬ気になって」

こんなことを言つて小野の家へ立ち寄つた。ここでは迎えることを期していて食事の仕度たくもできていた。昔どおりに給仕をする少将の尼の普通に異なつた袖口そでぐちの色も悪い感じはせず美しく思われた。尼夫人は昨日きのうよりもまだひどい涙目になって中将を見た。感謝しているのである。話のついでに中将が、

「このお家うちに来ておいでになる若い方はどなたですか」

と尋ねた。めんどうになるような気はするのであつたが、すでに隙見すきみをしたらしい人に隠すふうを見せるのはよろしくないと思つた尼君は、

「昔の人のことをあまり心に持つていますのは罪の深いことになると思ひまして、ここ幾月か前から娘の代わりに家へ住ませることになつた人のことでしょう。どういう理由か沈んだふうでばかりいまして、自分の存在が、人に知れますことをいやがっておりますから、こんな谷底へだれがあなたを捜しに来ますかと私は慰めて隠すようにしてあげているのですが、どうしてその人のことがおわかりになつたのでしょうか」

「かりに突然求婚者になつて現われた私としましても、遠い路みちも思わず来たということ

特典を与えられなければならぬのですからね、ましてあなたが昔の人と思ってお世話を  
していらつしやる方であれば、私の志を昔に継いで受け入れてくだすっていいはずだと思  
います。どんな理由で人生を悲観してられる方なのですかねえ。慰めておあげしたく思  
われますよ」

好奇心の隠せぬふうで中将は言った。帰りぎわに懐紙へ、

あだし野の風になびくなをみなへし女郎花をみなへしわれしめゆはんみち路遠くとも

と書いて、少将の尼に姫君の所へ持たせてやった。尼君もそばでいっしよに読んだ。

「返しを書いておあげなさい。紳士ですから、それがあとのめんどうを起こすことになり  
ますまいからね」

こう勧められても、

「まずい字ですから、どうしてそんなことが」

と言い、浮舟の聞き入れないのを見て、失礼になることだからと尼君が、  
お話しいたしましたように、世間な馴れぬ内気な人ですから、

移し植ゑて思ひ乱れぬ女郎花浮き世をそむく草の庵いほりに

と書いて出した。はじめてのことであつてはこれが普通であらうと思つて中将は歸つた。中将は小野の人に手紙を送ることもさすがに今さら若々しいことに思われてできず、しかもほのかに見た姿は忘れることができずに苦しんでいた。厭えんせい世的せいになつてゐるのは何の理由であるかはわからぬが哀れに思われて、八月の十日過ぎにはまた小鷹狩こたかがりの歸りに小野の家へ寄つた。例の少将の尼を呼び出して、

「お姿を少し隙見で知りました時から落ち着いておられなくなりました」

と取り次がせた。浮舟の姫君は返辞をしてよいことと認めず黙つてゐると、尼君が、

「待乳まつちの山の（たれをかも待乳の山の女郎花秋と契れる人ぞあるらし）と見ております」

と言わせた。それから昔の姑しゅうとめと婿は対談したのであるが、

「氣の毒な様子で暮らしておいでになるとお話しになりました方のことをくわしく承りたく思います。満足のできない生活が続くものですから、山寺へでもはいつてしまいたくなるのですが、同意されるはずもない両親を思いまして、そのままにしています私は、幸福

な人には自分の沈んだ心から親しんでいく気になれませんが、不幸な人には慰め合うようになりたく思われてなりません」

中将は熱心に言う。

「不しあわせをお話しになろうとなさいますのには相当したお相手だと思えますけれど、あの方はこのまま俗の姿ではもういたくないということを終言うほどにも悲観的になっています。私ら年のいった人間でさえいよいよ出家する時には心細かったのですから、春秋に富んだ人に、それが実行できますかどうかと私はあぶながっています」

尼君は親がつて言うのであった。姫君の所へ行つてはまた、

「あまり冷淡な人だと思われまますよ。少しでも返辞を取り次がせておあげなさいよ。こんなわび住まいをしている人たちというものは、自尊心は陰へ隠して人情味のある交際をするものなのですよ」

などと言うのであるが、

「私は人とどんなふうにものを言うものなのか、その方法すら知らないのですもの。私は何の点でも人並みではございません」

浮舟の姫君はそのまま横になつてしまった。中将はあちらで、

「どちらへおいでになったのですか、御冷遇を受けますね。『秋を契ちぎれる』はただ私をおからかいになっただけなのですか」

などと尼君を恨めしそうに言い、

松虫の声をたづねて来しかどもまた萩原をきはらの露にまどひぬ

と歌いかけた。

「まあおかわいそうに、歌のお返しでもなさいよ」

尼夫人はこう姫君に迫るのであったが、そんな恋愛の遊戯めいたことをする気はなく、また一度歌を詠よめば、こうした時々返しを返しを責められるであろうことも煩わしいと思う心から、ものも言わずにいるのを見て尼夫人も女房もあまりにふがない人と思わしうらしかつた。尼君は若い時代に機智きぢを誇った才女であったのであろう。

「秋の野の露分け来たる狩りごろも葎むぐら茂れる宿にかこつな

迷惑がつておられます」

と言つてゐるのを、浮舟は聞きながら、こうしたことからまだ自分の世の中にいることが昔の人々に知れ始めることにならないであろうかと苦しく思つていた。姫君の気持ちも知らずに、昔の姫君と同じくこの媚君をもなつかしがることの多い女房たちは、

「ただちよつと深い意味でもなくお立ち寄りになつた方ですから、お話をなすつてもよろしくない方へ進出しようなどとは大丈夫なさいませぬから、御結婚問題などは別にして、好意のある程度のお返辞だけはしておあげなさいまし」

などと言ひ、からだ身体も引き動かすばかりに言うのであつた。さすがに年を取つた女たちは尼君が柄にもなく若々しく歌らしくもない歌をいい気で詠よんで中将の相手をしてゐることは興きざめることと思つてゐるのである。

なんとという不幸な自分であろう、捨てるのに躡ちゆう躡ちよしなかつた命さえもまだ残つていて、この先どうなつていくのであろう、全く死んだ者として何なん人びとからも忘れられたいと思ひ悩んで、横になつたままの姿で浮舟うきふねはいた。中将は何かほかにも愁うれわしいことがあ  
るのか、ひどく歎たん息そくをして、笛を鳴らしながら「鹿しかの鳴く音ねに」（山里は秋こそことに  
わびしけれ鹿の鳴く音に目をさましつつ）などと口ずさんでゐる様子は相当な男と見えた。

「ここへまいっては昔の思い出に心は苦しみますし、また新しく私をあわれんでくださってよい方はその心になってくださらぬし『世のうき目見えぬ山路』とも思われません」

と恨めしそうに言い、帰ろうとした時に、尼君が、

「あたら夜を（あたら夜の月と花とを同じくは心知れらん人に見せばや）お帰りになるのですか」

と言つて、御簾みすの所へ出て来た。

「もうたくさんですよ。山里も悲しいものだということがわかりましたから」

などと中将は言い、新しい姫君へむやみに接近したいふうを見せることもしたくない、ほのかに少し見た人の印象のよかつたばかりに、空虚で退屈な心の補いに恋をし始めたにすぎない相手があまりに冷淡に思ひ上がった態度をとっているのは場所柄にもふさわしくないことであると不快に思われる心から、帰ろうとするのであつたが、尼君は笛の音に別れることすらも惜しくて、

深き夜の月を哀れと見ぬ人や山の端は近き宿にとまらぬ

と奥様は仰せられますと取り次ぎで言わたのを聞くとまたときめくものを覚えた。

山の端に入るまで月をながめ見ん閨ねやの板間もしるしありやと

こんな返しを伝えさせている時、この家の大尼君が、さつきから笛の音を聞いていて、心の惹ひかれるままに出て来た。間で咳せきばかりの出るふるえ声で話をするこの老人はかえって昔のことを言いだしたりはしない。笛を吹く人がだれであるかもわからぬらしい。

「さあその琴をあなたはお弾ひきよ。横笛は月夜に聞くのがいいね。どこにいるか、童女たち、琴を奥様におあげなさい」

と言っている。さつきから大尼君らしいと中将は察して聞いていたのであるが、この家のどこにこうした大年寄が無事に暮らしていたのであろうと思ひ、老ろう若にやくも差別のない無常の世がこれによつてまた思われて悲しまれるのであつた。盤ばん涉しきちよう調じようずを上手じようずに吹いて、

「さあ、それではお合わせください」

と言う。これも相応に風流好きな尼夫人は、

「あなたのお笛は昔聞きましたよりもずっと巧妙におなりになったように思いますのも、平生山風以外に聞くもののないせいかもしれませぬ。私のはまちがいだらけになっていてでしょう」

と言いながら琴を弾いた。現代の人はあまり琴の器楽を好まなくなつて、弾き手も少なくなつたためか、珍しく身にしむように思つて、中将は相手の絃いとの音ねを聞いた。松風もゆるやかに伴奏をし、月光も笛の音を引き立てるようになさしていたから、いよいよ大尼君を喜ばせることになつて、宵よまでもせず起き続けていた。

「昔はこの年寄りも和琴をうまく弾きこなしたのですがねえ、今は弾き方も変わつていくかしませんね。息子むすこの僧都そうずから、聞き苦しい、念仏よりほかのことをあなたはしないようになさいと叱しかられましたね。それじゃあ弾かせてもらわなくてもいいと思つて弾かないのですよ。それに私の手もとにある和琴は名器なのですよ」

大尼君はこんなふうに言い続けて弾きたそうに見えた。中将は忍び笑いをして、  
 「僧都がおとめになるのはどうしたことでしょう。極楽という所では菩薩ぼさつなども皆音楽の遊びをして、天人は舞つて遊ぶということなどで極楽がありがたく思われるのですがね。仏勤めの障さわりになることでもありませんしね、今夜はそれを伺わせてください」

とからかう気で言った言葉に、大尼君は満足して、

「さあ座敷がかりの童女たち、和琴あずまを持つておいでよ」

この短い言葉の間にも咳せきは引つきりなしに出た。尼夫人も女房たちも大尼君に琴を弾かれては見苦しいことになるとは思ったが、このためには僧都をさえも恨めしそうに人へ訴える人であるからと同情して自由にさせておいた。楽器が来ると、笛で何が吹かれていたかも思つてみず、ただ自身だけがよい気持ちになつて、爪つま音おともさわやかに弾き出した。笛も琴も音のやんだのは自分の音楽をもつばらに賞美したい心なのであろうと当人は解釈して、ちりふり、ちりちり、たりたりなどかき返してははしやいだ言葉もつけて言うのも古めかしいことのかぎりであつた。

「おもしろいですね。ただ今では聞くことのできないような言葉がついていて」  
などと中将がほめるのを、耳の遠い老尼はそばの者に聞き返して、

「今の若い者はこんなことが好きでなさそうですよ。この家うちに幾月か前から来ておいでになる姫君も、容貌きりようはいいらしいが、少しもこうしたむだな遊びをなさらず引つ込んでばかりおいでになりますよ」

と、賢さかしがつて言うのを尼夫人などは片腹痛く思った。大老人のあずま琴で興味のしらけ

てしまった席から中将の帰って行く時も山おろしが吹いていた。それに混じって聞こえてくる笛の音が美しく思われて人々は寝ないで夜を明かした。

翌日中将の所から、

昨日は昔と今の歎きに心が乱されてしまいました、失礼な帰り方をしました。

忘れぬ昔のことも笛竹の継ぎしふし節にも音ぞ泣かれける

あの方へ私の誠意を認めてくださるようにお教えください。内に忍んでいるだけで足る心でしたならこんな軽はずみ男と見られますようなことまでは決して申し上げないでしょう。

と言う消息が尼君へあった。これを見て昔の婿君をなつかしんでいる尼夫人は泣きやむことができぬふうに涙を流したあとで返事を書いた。

笛の音に昔のことも忍ばれて帰りしほども袖ぞ濡れにし

不思議なほど普通の若い人と違った人のことは老人の間わず語りからも御承知のできたことと思えます。

と云うのである。

恋しく思う人の字でなく、見なれた昔の姑しゅうとめの字であるのに興味が持てず、そのまま中将は置き放しにしたことであろうと思われる。

荻おぎの葉に通う秋風ほどもたびたび中将から手紙の送られるのは困ったことである。人の心というものはどうしていちずに集まってくるのであろう、と昔の苦しい経験もこのごろはようやく思い出されるようになった浮舟は思い、もう自分に恋愛をさせぬよう、また人からもその思いのわからぬように早くしていただきたいと仏へ頼む意味で経を習って姫君は読んでいた。心の中でもそれを念じていた。こんなふうに寂しい道を選んでいる浮舟を、若い人でありながらおもしろい空気も格別作らず、うつつうしいのがその性質なのであろうと周囲の人は思った。容貌ようぼうのすぐれて美しいことでほかの欠点はとがめる気もせず朝暮の目の慰めにしていた。少し笑ったりする時には、珍しく華麗なものを見せられる喜びを皆した。

九月になって尼夫人は初瀬はせへ詣まいることになった。さびしく心細いばかりであった自分は

故人のことばかりが思われてならなかったのに、この姫君のように可憐で肉身とより思えぬ人を得たことは観音の利益であると信じて尼君はお礼詣りをするのであった。

「さあいつしよに行きましょう。だれにわかることがあるものですか。同じ仏様でもあのお寺などにこもってお願ひすることは効験ききめがあつてよい結果を見た例がたくさんあるのですよ」

と言つて、尼君は姫君に同行を勧めるのであつたが、昔母や乳母めのとなどがこれと同じことを言つてたびたびお詣りをさせたが、自分には、何のかいもなかつた、命さえも意こころのままにならず、言いようもない悲しい身になつてゐるではないか、と浮舟は思ううちにもこの一家の知らぬ人々に伴われてあの山路やまみちを自分の来たことは恥はづかしい事実であつたと身に沁しんでさえ思われた。強情ごうじやうらしくは言わずに、

「私は気分が始終悪うございますから、そうした遠路とのおみちをしましてまた悪くなるようなことがないかと心配ですから」

と断わつていた。いかにもそうした物恐れをしそうな人であると思つて、尼君はしいても言わなかつた。

はかなくて世にふる川のうき瀬には訪ねも行かじふたもと一本の杉すぎ

と書いた歌が手習い紙の中に混じっていたのを尼君が見つけて、

「ふたもと一本とお書きになるのでは、もう一度お逢いになりたいと思う方があるのですね」

とじょうだん冗談で言いあてられたために、姫君ははつとして顔を赤くしたのもあいぎょう愛嬌の添すつたことで美しかった。

ふる川の杉の本もとだち立知らねども過ぎにし人によそへてぞ見る

平凡なものであるが尼君は考える間もないほどのうちにこんな歌を告げた。目だたぬようにして行くことにしていたのであるが、だれもかれもが行きたがり、留守宅るすの人の少ない中へ姫君を置いて行くのを尼君は心配して、賢い少将の尼と、左衛門さえもんという年のいった女房、これと童女だけを置いて行つた。

皆が出立して行く影を浮うきかね舟はいつまでもながめていた。昔に変わった荒涼たる生活と  
はいいながらも、今の自分には尼君だけがたよりに思われたのに、その自分を愛してくれ

る唯一の人と別れているのは心細いものであるなどと思い、つれづれを感じているうちに中將から手紙が来た。

「お読みあそばせよ」

と言うが、浮舟は聞きも入れなかった。そして常よりもまた寂しくなった家の庭をなぐめ入り、過去のこと、これからあとのことを思つては歎息ばかりされるのであった。

「拝見していても苦しくなるほどお滅入りめいりになつていらつしやいますね。碁をお打ちなさいませよ」

と少將が言う。

「下手へたでしようがないのですよ」

と言いながらも打つ氣に浮舟はなつた。盤を取りにやつて少將は自信がありそうに先手を姫君に打たせたが、さんざんなほど自身は弱くて負けた。それでまた次の勝負に移つた。

「尼奥様が早くお帰りになればよい、姫君の碁をお見せしたい。あの方はお強いのですよ。僧都様はお若い時からたいへん碁がお好きで、自信たっぷりでしたところ  
がね、尼奥様は碁聖上人きせいになつて自慢をしようとは思いませんが、あなたの碁には負けな  
いでしようとお言いになりました、勝負をお始めになりますと、そのとおりに僧都様が二に

目お負けになりました。碁聖の碁よりもあなたのほうがもっとお強いらしい。まあ珍しい打ち手でいらつしやいます」

と少将はおもしろがって言うのであった。昔はたまにより見ることのなかった年のいった尼梳あますきの額に、面と向かつて始終相手をさせられるようになってはいやである。興味を持たれてはうるさい、めんどろなことに手を出したものであると思つた浮舟の姫君は、気分が悪いと言つて横になつた。

「時々は晴れ晴れしい気持ちにもおなりあそばせよ。惜しいではございませんか、青春を沈んでばかりおいでになりますことは。ほんとうに玉に瑕きずのある気がされます」  
などと少将は言つた。夕風の音も身に沁しんで思い出されることも多い人は、

心には秋の夕べをわかねどもながむる袖そでに露ぞ乱るる

こんな歌も詠よまれた。月が出て景色けしきのおもしろくなつた時分に、昼間手紙をよこした中将が出て来た。

いやなことである、なんとということであろうと思つた姫君が奥のほうへはいつて行くの

を見て、

「それはあまりでございますよ。あちらのお志もこんなおりからはことに深さのまさるものですよ、ほのかにでもお話しになることを聞いておあげなさいませ。あちらのお言葉が染しみになってお身体からだへつくようにも反感を持っていらっしやるのですね」

少将にこんなふうに言われれば言われるほど不安になる姫君であった。姫君もいっしょに旅に出かけたとき少将は客へ言ったのであるが、昼間の使いが一人は残っておられる、というようなことを聞いて行ったものらしくして中将は信じない。いろいろと言葉を尽くして姫君の無情さを恨み、

「お話を聞いて聞かせてほしいとは申しません。ただお近い所で、私のする話をお聞きくだすつて、その結果私に好意を持つことがおできにならぬならそうと言いきつていただきたいのです」

こんなことをどれほど言つても答えのないのでくさくさした中将は、

「情けなさすぎます。この場所は人の繊細な感情を味わつてくださるのに最も適した所ではありませんか。こんな扱いをしておいでになつて何ともお思ひにならないのですか」

とあざけるようにも言い、

「山里の秋の夜深き哀れをも物思ふ人は思ひこそ知れ

御自身の寂しいお心持ちからでも御同情はしてくだすつていいはずですが」

と姫君へ取り次がせたのを伝えたあとで、少将が、

「尼奥様がおいでにならない時ですから、紛らしてお返しをしておいていただくこともできません。何とかお言いあそばさないではあまりに人間離れのした方と思われるでしょう」  
こう責めるために、

うきものと思ひも知らで過ぐす身を物思ふ人と人は知りけり

と浮舟が返しともなく口へ上せたのを聞いて、少将が伝えるのを中将はうれしく聞いた。  
「ほんの少しだけ近くへ出て来てください」

と中将が言ったと言ひ、少将らは姫君の心を動かそうとするのであるが、姫君はこの人々を恨めしがっているばかりであった。

「あやしいほどにも御冷淡になさるではありませんか」

と言いながら女房がまた忠告を試みにはいつて来た時に、姫君はもう座にはいなくて、平生はかりにも行つて見る事のなかつた大尼君の室<sup>へや</sup>へはいつて行つていた。少将がそれをあきれたように思つて歸つて来て客に告げると、

「こんな住居<sup>すまい</sup>におられる人というものは感情が人より細かくなって、恋愛に対してだけでなく一般的にも同情深くなつておられるのがほんとうだ。感じ方のあらあらしい人以上に冷たい扱いを私にされるではないか。これまで恋の破局を見た方なのですか。そんなことでなく、ほかの理由があるのかね。この家<sup>うち</sup>にはいつまでおいでになるのですか」

などと言つて聞きたがる中将であつたが、細かい事実を女房も話すはずはない。

「思いがけず奥様が初瀬<sup>はせ</sup>のお寺でお逢いになりました、お話し合いになりました時、御縁続きであることがおわかりになりこちらへおいでになることにもなつたのでございます」  
とだけ言つていた。

浮舟の姫君はめんどろな性質の人であると聞いていた老尼の所でうつ伏しになつていたのであつたが、眠入<sup>ねい</sup>ることなどはむろんできない。宵惑いの大尼君は大きい鼾<sup>いびき</sup>の声をたてていたし、その前のほうにも後差<sup>あしざ</sup>しの形で二人の尼女房が寝ていて、それも主に劣るまい

とするようにいびぎ軒をかいていた。姫君は恐ろしくなつて今夜自分はこの人たちに食われてしまふのではないかと思うと、それも惜しい命ではないが、例の気弱さから死に行つた人が細い橋をあぶながつて後ろへもどつて来た話のように、わびしく思われてならなかつた。童女のこもきを従えて来ていたのであるが、ませた少女は珍しい異性が風流男らしく氣どつてすわつてゐるあちらの座敷のほうに心がひ惹かれて歸つて行つた。今にこもきが来るであらう、あらうと姫君は待つてゐるのであるが、頼みがいのない童女は主を捨てはなしにしておいた。

中将は誠意の認められないのに失望して歸つてしまつた。そのあとでは、

「人情がわからない方ね。引つ込み思案でばかりいらつしやる。あれだけの容貌きりようを持つておいでになりながら」

などと姫君をそし譏つて皆一所で寝てしまつた。

夜中時分かと思われるころに大尼君はひどい咳せきを續けて、それから起きた。灯ひの明りに見える頭の毛は白くて、その上に黒い布をかぶつていて、姫君が来てゐるのをいぶかつていたち鼯鼠はそうした形をするというように、額に片手をあてながら、

「怪しい、これはだれかねえ」

としつこそうな声で言い姫君のほうを見越した時には、今自分は食べられてしまうのであるという気が浮舟にした。幽鬼が自分を伴って行った時は失心状態であったから何も知らなかったが、それよりも今が恐ろしく思われる姫君は、長くわずらったあとで蘇生して、またいろいろな過去の思い出に苦しみ、そして今またこわいとも怖ろしいとも言いやうのない目に自分はあっている、しかも死んでいたらこれ以上恐ろしい形相のものの中に置かれていた自分に違いないとも思われるのであった。昔からのことが眠れないままに次々に思い出される浮舟は、自分は悲しいことに満たされた生涯であつたとより思われぬ。父君はお姿も見ることができなかつた。そして遠い東の国を母についてあちらこちらとまわつて歩き、たまさかにめぐり合うことのできて、うれしくも頼もしくも思つた姉君の所で意外な障りにあい、すぐに別れてしまうことになつて、結婚ができ、その人を信頼することによつて過去の不幸も慰められていく時に自分は過失をしてしまったことに思い至ると、宮を少しでもお愛しする心になつていたことが恥ずかしくてならない。あの方のために自分はこうした漂泊の身になつた、橘の小嶋の色に寄せて変わらぬ恋を告げられたのをなげうれしく思つたのかと疑われてならない。愛も恋もさめ果てた気がする。はじめから淡いながらも変わらぬ愛を持つてくれた人のことは、あの時、その時とそ

の人についてのいろいろの場合が思い出されて、宮に対する思いとは比較にならぬ深い愛を覚える浮舟うきふねの姫君であった。こうしてまだ生きているとその人に聞かれる時の恥ずかしさに比してよいものはないと思われる。そうであつてさすがにまた、この世にいる間にあの人をよそながらも見る日があるだろうかとも悲しまれるのであつた。自分はまだよくない執着を持っている、そんなことは思うまいなどと心を変えようとした。

ようやく鶏の鳴く声が聞こえてきた。浮舟は非常にうれしかった。母の声を聞くことができたならましてうれしいことであろうと、こんなことを姫君は思い明かして気分も悪かった。あちらへ帰るのに付き添つて来てくれるものは早く来てもくれないために、そのままお横たわつてしていると前夜のいびきのいびきの尼女房は早く起きて、粥かゆなどというまずいものを喜んで食べていた。

「姫君も早く召し上がりませ」

などとそばへ来て世話のやかれるのも気味が悪かった。こうした朝になれない気がして、からだ「身体の調子がよくありませんから」

と穏やかな言葉で断わっているのに、しいて勧めて食べさせようとされるのもうるさかった。

下品な姿の僧がこの家へおおぜい来て、

「僧都そうずさんが今日御下山きようになりますよ」

などと庭で言っている。

「なぜにわかになつたのですか」

「一品いっぽんの宮様みやが物怪もののけでわずらつておいでになつて、本山の座主ざすが修法をしておいでになります、やはり僧都が出て来ないでは効果の見えることはないということになつて、昨日は二度もお召しの使いがあつたのです。左大臣家の四位少将が昨夜夜ふけてからまたおいでになつて、中ちゆうぐう宮様のお手紙などをお持ちになつたものですから、下山の決意をなさつたのですよ」

などと自慢げに言っている。ここへ僧都の立ち寄つた時に、恥ずかしくても逢つて尼にしてほしいと願おう、とがめだてをしそうな尼夫人も留守で他の人も少ない時で都合がよいと考えついた浮舟は起きて、

「僧都様が山をお下りおになりました時に、出家をさせていただきたいと存じますから、そんなふうにあなた様からおとりなしをくださいまし」

と大尼君に言くと、その人はほけたふうにならずいた。

常の居間へ帰った浮舟は、尼君がこれまで髪を自身以外の者に梳くことをさせなかったことを思うと、女房に手を触れさせるのがいやに思われるのであるが、自身ではできないことであつたから、ただ少しだけ解きおろしながら、母君にもう一度以前のままの自身を見せないで終わるのかと思うと悲しかった。重い病のために髪も少し減つた気が自身ではするのであるが、何ほど衰えたとも見えない。非常にたくさんで六尺ほどもある末のほうのことに美しかったところなどはさらにこまかく美しくなつたようである。「たらちねはかかれとてしも」（うば玉のわが黒髪を撫でずやありけん）ひとりごと 独言に浮舟は言つていた。夕方に僧都が寺から来た。南の座敷が掃除され裝飾されて、そこを円い頭が幾つも立ち動くのを見るのも、今日の姫君の心には恐ろしかった。僧都は母の尼の所へ行き、「あれから御機嫌はどうでしたか」ごきげん などと尋ねていた。

「東の夫人は参詣さんけいに出られたそうですね。あちらにいた人はまだおいでですか」  
「そうですよ。昨夜は私の所へ来て泊まりましたよ。身体からだが悪いからあなたに尼の戒を受  
けさせてほしいと言つておられましたよ」

と大尼君は語つた。そこを立つて僧都は姫君の居間へ来た。

「ここにいらつしやるのですか」

と言い、きちょう几帳の前へすわった。

「あの時偶然あなたをお助けすることになったのも前生の約束事と私は見ていて、きとう祈祷に骨を折りましたが、僧は用事がなくては女性に手紙をあげることができず、ごぶさた御無沙汰してしまいました。こんな人間離れのした生活をする者の家などにどうして今までおいでになりますか」

こう僧都は言った。

「私はもう生きてしまいと思つた者ですが、不思議なお救いを受けまして今日きょうまでおりますのが悲しく思われます。一方ではいろいろと御親切にお世話をしてくださいました御恩は私のようなあさはかな者にも深く身に沁しんでかたじけなく思われているのでございますから、このままにしていましてはまだ生き続けることができない気のいたしますのをお助けください。ぜひそうしていただきとうございます。生きていますもとうてい普通の身ではおられない気のする私なのでございますから」

と姫君は言う。

「まだ若いあなたがどうしてそんなことを深く思い込むのだろう。かえって罪になること

ですよ。決心をした時は強い信念があるようでも、年月がたつうちに女の身をもつては罪に墮おちて行きやすいものなのです」

などと僧都は言うのであったが、

「私は子供の時から物思いをせねばならぬ運命に置かれておりまして、母なども尼にして世話がしたいなどと申したことがございます。まして少し大人になりましたがわかりかけてきましてからは、普通の人にはならずこの世でよく仏勤めのできる境遇を選んで、せめて後世ごせにだけでも安樂を得たいという希望が次第に大きくなっておりましたが、仏様からそのお許しを得ます日の近づきますためか、病身になってしまいました。どうぞこのお願いをかなえてくださいませ」

浮舟の姫君はこう泣きながら頼むのであった。不思議なことである、人に優越した容姿を得ている人が、どうして世の中をいとわしく思うようになったのだろう、しかしいつか現われてきた物もののけ怪もこの人は生きるのをいとわしがっていたと語った。理由のないことではあるまい、この人はあのままおけば今まで生きている人ではなかったのである。悪い物怪にみいられ始めた人であるから、今後も危険がないとは思えないと僧都は考えて、「ともかくも思い立って望まれることは御仏の善行として最もおほめになることなのです。

私自身僧であつて反対などのできることはありません。尼の戒を授けるのは簡単なことですが、御所の急な御用で山を出て来て、今夜のうちに宮中へ出なければならぬことになつていますからね、そして明日から御修法みしほを始めるとすると七日して退出することになるでしょう。その時にしましょう」

僧都はこう言つた。尼夫人がこの家にいる時であれば必ずとめるに違いないと思うと、遂行が不可能になるのが残念に思われる浮舟の君は、

「ただ病氣のためにそういたしましたようになりましては効力が少のうございましょう。私はかなり身体からだの調子が悪いのでございしますから、重態になりましたあとでは形式だけのことのようになるのが残念でございしますから、無理なお願ひではございしますが今日こんにちに授戒をさせていただきとうございします」

と言つて、姫君は非常に泣いた。単純な僧の心にはこれがたまらず哀れに思われて、「もう夜はだいぶふけたでしょう。山から下つて来ることを、昔は何とも思わなかつたものだが、年のいくにしたがつて疲れがひどくなるものだから、休息をして御所へまいろうと私は思つたのだが、そんなにも早いことを望まれるのならさつそく戒を授けましょう」と言うのを聞いて浮舟はうれしくなつた。鉢はちと櫛くしの箱の蓋ふたを僧都の前へ出すと、

「どこにいるかね、坊様たち。こちらへ来てくれ」

僧都は弟子でしを呼んだ。はじめに宇治でこの人を発見した夜の阿闍梨あじやりが二人とも来ていたので、それを座敷の中へ来させて、

「髪をお切り申せ」

と言った。道理である、まれな美貌びぼうの人であるから、俗の姿でこの世にいては煩累わんるいとなることが多いに違いないと阿闍梨あじやりらも思った。そうではあっても、几帳きちょうの垂帛たれぎぬの縫開ぬいあけから手で外へかき出した髪かみのあまりのみごときしばらく鋏はさみの手を動かすことはできなかった。

座敷でこのことのあるころ、少将の尼は、それも師の供をして下って来た兄の阿闍梨あじやりと話すために自室じしつに行っていた。左衛門さえもんも一行の中に知人があったため、その僧のもてなしに心を配っていた。こうした家ではそれぞれの懇意こんいな相手ができていて、馳走ちそうをふるまったりするものであったから。こんなことでこもきだけが姫君の居間に侍まじっていたのであるが、こちらへ来て、少将の尼に座敷でのことを報告した。少将があわてふために行つて見ると、僧都は姫君に自身の法衣ほうえと袈裟けさを仮にと言つて着せ、

「お母様のおいになるほうにと向かつて拝みなさい」

と言つていた。方角の見当もつかないことを思った時に、忍びかねて浮舟は泣き出した。「まあなんとしたことでございますか。思慮の欠けたことをなさいます。奥様がお帰りになりましてどうこれをお言いになりますしよう」

少将はこう言つて止めようとするのであつたが、信仰の境地に進み入ろうと一步踏み出した人の心を騒がすことはよろしくないと思つた僧都が制したために、少将もそばへ寄つて妨げることはできなかつた。「るてんさんがいちゆう流転三界中、おんあいふのうだん恩愛不能断」と教える言葉には、もうすでに自分に自分はそのから解脱げだつしていたではないかとさすがに浮舟をして思わせた。多い髪はよく切りかねて阿闍梨が、

「またあとでゆるりと尼君たちに直させてください」

と言つていた。額髪の所は僧都そうずが切つた。

「この花の姿を捨てても後悔してはなりませんぞ」

などと言ひ、尊い御仏の御弟子の道を説き聞かせた。出家のことはそう簡単に行くものでないと尼君たちから言われていたことを、自分はこうもすみやかに済ませてもらった。生きた仏はかくのごとく効験を目的まのあたりに見せるものであると浮舟は思つた。

僧都の一行の出て行つたあとはまたもとの静かな家になつた。夜の風の鳴るのを聞きな

がら尼女房たちは、

「この心細い家にお住みになるのもしばらくの御辛抱しんぼうで、近い将来に幸福な御生活へおはいりになるものと、あなた様のその日をお待ちしていましたのに、こんなことを決行しておしまひになりました、これからをどうあそばすつもりでございませう。老い衰えた者でも出家をしてしましますと、人生へのつながりがこれで断然切れたことが認識されまして悲しいものでございますよ」

なおも惜しんで言うのであったが、

「私の心はこれで安静が得られてうれしいのですよ。人生と隔たってしまったのはいいことだと思えます」

こう浮舟は答えていて、はじめて胸の開けた気もした。

翌朝になるとさすがにだれにも同意を求めずにしたことであつたから、その人たちに変わった姿を見せるのは恥ずかしくてならぬように思う姫君であつた。髪すその裾すそがにわかになつた方へ上がつて、もつれもできてひろ拡がった不ぞろいになつた端を、めんどろいな説法などはせずに直してくれる人はないであろうかと思うのであるが、何につけても気おくれがされず、居間の中を暗くしてすわっていた。自分の感想を人へ書くようなことも、もとからよ

くできない人であったし、ましてだれを対象として叙述して行くという人もないのであるから、ただ硯すずりに向かつて思いのわく時には手習いに書くだけを能事として、よく歌などを書いていた。

なきものに身をも人をも思ひつつ捨ててし世をぞさらに捨てつる

もうこれで終わったのである。

こんな文字を書いてみずから身にしむように見ていた。

限りぞと思ひなりにし世の中をかへすがへすもそむきぬるかな

こうした考えばかりが歌にも短文にもなつて、筆を動かしている時に中將から手紙が来た。一家は昨夜ゆうべのことがあつて騒然としていて、来た使いにもそのことを言つて歸した。

中將は落胆した。宗教に傾いた心から自分の恋の言葉に少しの答えを与えることもし始めては煩いになると避けていたものらしい、それにしても惜しいことである。美しいよう

に少し見た髪を、確かに見せてくれぬかと女房に先夜も頼むと、よい時にと約束をしてくれたのであったがと残念で、二度目の使いを出した。

御挨拶あいさつのいたしようもないことを承りました。

岸遠く漕こぎ離るらんあま船に乗りおくれじと急がるかな

平生に変わって姫君はこの手紙を手を取って読んだ。もの哀れなふうになつていた時であつたから、書く気になつたものか、ほんの紙の端に、

こころこそ浮き世の岸を離るれど行くへも知らぬあまの浮き木ぞ

と例の手習い書きにした。これを少将の尼は包んで中将へ送ることにした。

「せめて清書でもしてあげてほしい」

「どういたしまして、かえって書きそこねたり悪くしてしまうだけでございます」

こんなことで中将の手もとへ来たのであつた。

恋しい人の珍しい返事が、うれしいとともに、今は取り返しのならぬ身にあの人はなつたのであると悲しく思われた。

初瀬詣りはせまいから帰つて来た尼君の悲しみは限りもないものであつた。

「私が尼になつて居るので、お勧めもすべきことだつたといふ思おうとしますが、若いあなたがこれからどうおなりになることでしょう。私はもう長くは生きていられない年で、死期しじが今日にも明日にも来るかもしれないのですから、あなたのことだけは安心して死ねますようにと思ひましてね、いろいろな空想も作つて、仏様にもお祈りをしたことだつたのですよ」

と泣きまろんで悲しみに堪えぬふうの尼君を見ても、実母が遺骸いがいすらもとめないで死んだものと自分を認めた時の悲しみは、これ以上にまたどんなものであつたであろうと想像され浮舟うきふねは悲しかった。いつものように何とも言わずに暗い横のほうへ顔を向けている姫君の若々しく美しいのに尼君の悲しみはやゆるめられて、たよらない同情心に欠けた恨めしい人であると思ひながらも泣く泣く尼君は法衣しやくの仕度に取りかかった。鈍色にびの物の用意に不足もなかつたから、小桂こうちぎ、袈裟けさなどがまもなくでき上がった。女房たちもそうした色のものを縫い、それを着せる時には、思ひがけぬ山里の光明とながめてきた人を悲

しい尼の服で包むことになつたと惜しがり、僧都を恨みもし、譏りもした。

一品の宮の御病気は、あの弟子僧の自慢どおりに僧都の修法によつて、目に見えるほどの奇瑞があつて御恢復になつたため、いよいよこの僧都に尊敬が集まつた。病後がまだ不安であるという中、宮の思召があつて、修法をお延ばさせになつたので、予定どおりに退出することができずに僧都はまだ御所に侍していた。

雨などの降つてしめやかな夜に僧都は夜居の役を承つた。御病中の奉仕に疲れの出た人などは皆部屋へ下がつて休息などして、お居間の中に侍した女房の数の少ないおり、中宮は姫宮と同じ帳台においてになつて、僧都へ、

「昔からずっとあなたに信頼を続けてきましたが、その中でも今度見せてくださいましたお祈りの力によつて、あなたさえいてくだされば後世の道も明るいに違いないと頼もしさがふえました」

こんなお言葉を賜つた。

「もう私の生命も久しく続くものでございませぬことを仏様から教えられておりますうちにも、今年と来年が危険であるということが示されておりましたから、専念に御仏を念じようと存じまして、山へ引きこもつておりましたのでございませぬが、あなた様からのおそ

れおおい仰せ言で出てまいりました」

などと僧都は申し上げていた。お憑つきした物ものの怪けが執念深いものであったこと、いろいろとちがった人の名を言つて出たりするのが恐ろしいということ、などを申していた話のついでに、

「怪しい経験を私はいたしました。今年の三月に年をとりました母が願のことで初瀬へまいったのでございましたが、帰り途みちに宇治の院と申す所で一行は宿泊いたしましたのでございます。そういたしましたような人の住まぬ大きい建物には必ず悪霊などが来たりしております。病氣になつておりました母のためにも悪い結果をもたらすまいかと心配をいたしておりますと、はたしてこんなことがあつたのでございます」

と、あの宇治で浮舟の姫君を発見した当時のことを申し上げた。

「ほんとうに不思議なことがあるものね」

と仰せになつて、気味悪く思召す中宮は近くに眠つていた女房たちをお起こさせになつた。大将と友人になつている宰相の君は初めからこの話を聞いていた。起こされた人々には少しく話の筋がわからなかつた。僧都は中宮が恐ろしく思召すふうであるのを知つて、不謹慎なことを申し上げてしまつたと思ひ、その夜のことだけは細説するのをやめた。

「その女の人が今度のお召しに出仕いたします時、途中で小野に住んでおります母と妹の尼の所へ立ち寄りますと、出てまいりまして、私に泣く泣く出家の希望を述べて授戒を求めましたので落飾させてまいりました。私の妹で以前の衛門督えもんのかみの未亡人の尼君が、亡くなしました女の子の代わりと思ひまして、その人を愛して、それで自身も幸福を感じていましたわけで、ずいぶん大事にいたわつていたのでございますから、私の手で尼にしましたのを恨んでいるらしゅうございます。實際容貌ようぼうのまれにすぐれた女性でございましたから、仏勤めにやつれてゆくであろうことが哀れに思われました。いったいだれの娘だったのでございましょう」

能弁な人であつたから、あの長話を休まずすると、

「どうしてそんな所へ美しいお姫様を取つて行つたのでしょうか」

宰相の君がこう尋ねた。

「いや、それは知らない。あるいは妹の尼などに話しているかもしれない。実際に貴族の家の人であれば、行くえの知れなくなつたことが噂うわさにならないはずはないわけですから、そんな人ではありませんまい。田舎いなかの人の娘にもそうした麗質の備わつた人があるかもしれません。竜りゅうの中から仏が生まれておいでになつたということがなければですがね、しかし

平凡な家の子としては前生で善因を得て生まれて来た人に違いございません。そんな人なのでございます」

などと僧都は言っていた。そのころに宇治で自殺したと言われている人を中宮は考えておいでになった。宰相の君も実家の姉の話に行くえを失ったと聞いた宇治の姫君のことが胸に浮かび、それではないかと思つたのであるが、そんたく忖度するだけで断言することはできなかった。僧都もまた、

「その人も生きていると人に知らせたくない、知ればよろしくないようなことを起こしそうな人のあるように、それとなく言っているふうなのでございますから、どこまでも秘密として私も黙しているべきでしたが、あまりに不思議な事実でございますからその点だけをお耳に入れましたわけでございます」

と言い、隠そうとするふうであつたから宰相はだれにもそのことは言わなかつた。中宮はこの人にだけ、

「僧都のした話は宇治の姫君のことらしい、大将に聞かせてやりたい」

とお言いになったが、その人のためにも女のためにも恥として隠すはずであることを、決定的にそれとすることもできないままで人格の高い弟に言いだすのも恥ずかしいことで

あると思召されて沈黙しておいでになった。

姫宮が全癒ぜんゆあそばしたので僧都も山の寺へ帰ることになった。小野の家へ寄ってみると、尼君は非常に恨めしがって、

「かえってこんなふうになっておしまいになつては、将来のことで、罪にならぬことも罪を得る結果になるでしょうのに、相談もしてくださらなかったのが不満足に思われてなりません」

と言つたが、もうかいのないことであつた。

「今後はもう仏のお勤めだけを専心になさい。若い人も無常の差のないのが人生ですよ。はかないものであるとお悟りになつたのも、まして道理に思われるあなたですからね」

この僧都の言葉も浮舟は恥ずかしく聞いた。宇治で発見された時からのことを思えばそれに違いないからである。

「法服を新しくなさい」

僧都はこう言つて、御所からの賜わり物の綾あやとかうすものとかを贈つた。

「私の生きています間は、あなたに十分尽くします。何も心配することはありません。無

常の世に生まれて人間の言う栄華にまどわれていては、これを自身のためにも人のためにも快く捨てることができなくなるものです。この寂しい林の中にお勤めの生活をしていては、何に恨めしさの起ることがありますか、何を恥ずかしく思うことをしますか、人間の命のある間は木の葉の薄さほどのものですよ」

こう説き聞かせて、「しやうもんあかつきにいたりてつきはいくわいす松門 暁 到 月 徘徊」( はくじやうひねもすかせせうしつ 柏城 尽 日 風 蕭 瑟 ) と

僧であるが文学的の素養の豊かな人は添えて聞かせてもくれた。唐の詩で陵園を守る後宮人を歌ったものである。かねて願っていたようなよい師であると思つて姫君は感激していた。

ある日風がひねもす吹きやまず、寂しい音が立つていたから、心細くなつている時に、来ていた僧の一人が、

「やまぶし山伏というものはこんな日にこそ声を出して泣きたくなるものだ」

と言つているのを聞き、姫君は自分ももう山伏になつたのである、だから涙がとまらないのであろうと思ひながら、縁側に近い所へ出て外を見ると、軒の向こうの山路をいろいろの狩衣かりぎぬを着て通るのが見えた。叡山えいざんへ上がる人もこの道を通るのはまれであつて、黒谷という所から歩いて行く僧の影を時々見ることがあるだけだったのに、普通の服装の

人を見いだしたのは珍しく思われたのであったが、それは失恋した中将であった。もうかいのないこととしても、自分の心を告げておきたいと思つて来たのであるが、紅葉もみじの美しく染まつて他の所よりもきれいにいろいろと混じつて立つた庭であつたから、門をはいるとすぐにもう行く秋の身にしむことを中将は感じた。この風雅な場所に住む美しい人を恋人にしていたならば興味の多いことであろうなどと思つた。

「少し閑散になりました、退屈なものですから、こちらの紅葉も見ごろになつていようと思つて出かけて来ました。いつもここはいい所ですね。なつかしい一夜の宿が借りたくなる所です」

こう言つて中将は庭をながめていた。感じやすい涙を持った尼君はもう泣いていた。

木がらしの吹きにし山の麓ふもとには立ち隠るべき蔭かげだにぞなき

と言つと、

待つ人もあらしと思ふ山里の梢こすねを見つつなほぞ過ぎうき

と中将は返しをした。尼になった人のことをまだあきらめきれぬように言い、

「お変わりになつた姿を少しだけのぞかせてください」

と少将の尼に求めた。それだけのことでも約束してくれた義務としてしななければならぬと責められて、少将が姫君の室へはいつてみると、人に見せないのは惜しいような美しい恰好かっこうで浮舟の姫君はいたのであった。淡鈍色うすにびの綾あやを着て、中に萱草色かんそうという透明な明るさのある色を着た、小柄な姿が美しく、近代的な容貌ようぼうを持ち、髪すその裾には五重の扇を拈ひろげたようなはなやかさがあつた。濃厚に化粧をした顔のように素顔も見えてほの赤くにおわしいのである。仏勤めはするのであるがまだ数珠じゆずは近い几帳きちようの棹さおに掛けられてあつて、経を読んでいる様子は絵にも描かきたいばかりの姫君であつた。少将は自身でも見るたびに涙のとどめがたい姫君の姿を、恋する男の目にはどう映るであろうと思ひ、よいおりでもあつたのか禰からかみ子の鍵かぎ穴あなを中将に教えて目の邪魔じやまになる几帳などは横へ引いておいた。これほどの美貌の人とは想像もしなかつた、自分の理想に合致した麗人であつたものと思うと、尼にさせてしまったことが自身の過失であつたように残念にくちおしく思われる心を、これをよくおさえることができなくつては、静かにすべき隙見すきみに激情のまま

の身じろぎの音もたててしまいかもしれぬと気づいて立ち退いた。こんな美女を失った人が捜さずに済ませる法があるうか、まただれそれ、だれの娘の行くえが知れぬとか、また人を怨んで尼になったとか自然噂にはなるものであるかと返す返すいぶかしく思われた。尼になってもこんな美しい人は決して愛人にして悪感の起るものではあるまい、かえって心が強く惹かれることになるであろう、極秘裡にやはりあの人を自分のものにしようと、こんなことを心にきめた中将は、こちらの尼君の座敷に来て、気を入れて話をしていた。

「俗の人でおいでになつた間は、私と御交際くださるにもいろいろさしさわりがあつたでしょうが、落飾されたあとでは気楽につきあつていただけの気がします。そんなふうにあなたからお話しになつておいてください。昔のことが忘れられないために、こんなふうにご訪問をしていますが、またもう一つ友情というものを持ち合う相手がふえれば幸福になりうるでしょう」

などと言った。

「将来がどうなるかと心細く、気がかりでなりませんのに、厚い御友情でお世話をくださる方があるのはうれしいことでございます。亡くなりましたあとのことともそう承つて安心されます」

と言つて尼君は泣くのであつた。こんな様子を見せるのはよほど濃い尼君の血族に違いないがだれであろうと中将はなおいぶかしがった。

「将来のお世話は命も不定ふじょうのものですし、私も生き抜く自信の少ないものですが、そうお話を承つた以上は決して忘れることはありません。あの方に縁のある方が實際この世におられないのでしょうか、そんなことがまだ少し不安で、それは障さわりになることでもありませんが、隔ての一つ残されている気はします」

「普通の形でおいになれば、いつまたそんな人が来られるかもしれないませんが、もう現世げんせの縁を絶つた身の上になつておられる以上は私も安心しておられます。自身の気持ちもそう見えますからね」

こんなふうに話し合つた。中将は姫君のほうへも次の歌を書いて送るのであつた。

おほかたの世をそむきける君なれど厭いとふによせて身こそつらけれ

誠意をもつて将来までも力になろうと言つていることなども尼君は伝えた。

「兄弟だと思つておいでなさいよ。人生のはかなさなどを話し合つてみれば慰みになるで

しよう」

「見識のある方のお話などを伺つても、私にはよく理解できないのが残念でございます」  
とだけ言つても、世を厭ういとように人を厭うたという言葉について浮舟うきふねは何も答えなかつた。思いのほかな過失をしてしまった過去を思うと自分ながらうとましい身である、何ともものを感じることはない朽ち木のようになって人から無視されて一生を終えようと、姫君はこの精神を通そうとしていた。そうした気持ちから、今までは憂鬱ゆううつから自己を解放することのできなかつた人であるが、近ごろは少し晴れ晴れしくなつて、尼君と遊び事をしたり、碁を打つたりして暮らすこともある。仏勤めもよくして法華経ほけきょうはもとより他の経なども多く読んだ。

雪が深く降り積んで、出入りする人影も皆無になつたところは寂しさのきわまりなさを姫君は覚えた。

年が明けた。しかし小野の山蔭やまかげには春のきざしらしいものは何も見ることができない。すつかり凍つた流れから音の響きがないのさえ心細くて、「君にぞ惑ふ道に惑はず」とお言いになつた人はすべての禍根かこんを作つた方であると、もう愛は覚えなくなつているのであるが、そのおりの光景だけはなつかしく目に描かれた。

かきくらす野山の雪をながめてもふりにしことぞ今日も悲しき

などと書いたりする手習いは仏勤めの合い間に今もしていた。自分のいなくなった春から次の春に移ったことで、自分を思い出している人もあろうなどと去年の思い出されることが多かった。そまつな籠かごに若菜を盛って人が持参したのを見て、

山里の雪間の若菜摘みはやしなほ生おひさきの頼まるるかな

という歌を添えて姫君の所へ尼君は持たせてよこした。

雪深き野べの若菜も今よりは君がためにぞ年もつむべき

と書いて来た返しを見て、実感であろうと哀れに思うのであった。尼姫君などでなく、宝とも花とも見て大事にしたかった人であるのにと真心から尼君は悲しがって泣いた。

寢室の縁に近い紅梅の色の香も昔の花に変わらぬ木を、ことさら姫君が愛しているのは「春や昔の」（春ならぬわが身一つはもとの身にして）と忍ばれることがあるからである。御仏に後夜の勤行の闕伽の花を供える時、下級の尼の年若なのを呼んで、この紅梅の枝を折らせると、恨みを言うように花がこぼれ、香もこの時に強く立つた。

袖ふれし人こそ見えね花の香のそれかとにほふ春のあけぼの

姫君のその時の作である。

大尼君の孫で紀伊守きいのかみになつてゐる人がこのころ上京していて訪ねて来た。三十くらいできれいな風采ふうさいをし思ひ上がった顔つきをしていた。大尼君の所で去年のこととか、一おとしととし昨年としのこととかを訊きこうとしてゐるのであつたが、ぼけてしまったふうであつたから、そこを辞して叔母おばの尼君の所へ来た。

「非常に老いぼれておしまいになりましたね。気の毒ですね。御老体のお世話をするのもできずに遠い国で年を送つていますのは相済まぬことだと思つてゐるのですよ。両親のいなくなりましてからは、お祖母おばあさんだけがその代わりのたいせつな方だと思つて来たの

ですがね。常陸夫人からはたよりがまいりますか」

と言うのはこの人の女の兄弟のことらしい。

「歳月がたつにしたがつて周囲が寂しくなりますよ。常陸は久しく手紙をよこしませんよ。上京するまでお祖母様ぼあがいらつしやるかどうかあぶないようでもあるのですよ」

浮舟の姫君は自身の親と同じ名の呼ばれていることにわけもなく耳がとまるのであったが、また客が、

「京へ出てまいってもすぐに伺えませんでした。地方官としてこちらでする仕事がたくさんでめんどうなことも中にはあるのです。それに昨日きのうこそは何おうと思っていたのですが、それも右大将さんの宇治へおいでになったお供に行つてしまいましたね。以前の八の宮の住んでおいでになった所に終日おいでになったのですよ。宮の姫君の所へ通つておられたのですが、最初の方は前にお亡なくしになって、そのお妹さんをまたそこへ隠すように住ませて通つておいでになったのですが、去年の春またお亡なくなりました。一周忌の仏事をされることになっていまして、宇治の寺の律師をお呼び寄せになって、その日の指さ図ずをしておいでになりましたね。私もその方に供える女の装束一そろいの調製を命ぜられました。あなたが、あなたの手でこしらえてくださらないでしょうか。織らすものは急いで織り屋

へ命じることになりますから」

こう言うのを姫君が聞いていて身にしまぬわけもない、人に不審を起こさせまいと奥のほうに向いていた。尼君が、

「あの聖ひじりみやの宮様の姫君は二人と聞いていましたがね、兵部ひょうぶぎょう卿の宮の奥様はどうなの、

そのお一人でしょう」

と問うた。

「大将さんのあとのほうの御愛人は八の宮の庶子でいらっしやったのでしよう。正当な奥様という待遇はしておいでにならなかったのですが、今では非常に悲しがつておいでになります。初めの方にお別れになった時みたいへんで、もう少して出家もされるところでした」

こんなことも語っている。大将の家来の一人であるらしいと思うと、さすがに恐ろしく思われる姫君であった。

「しかもお二人とも同じ宇治でお亡なくしになったのですから不思議ですね。昨日きのうもお気の毒なことでした。川に近い所で水をおのぞきになって非常にお泣きになりましたよ、家うちへお上がりになって柱へお書きになった歌は、

見し人は影もとまらぬ水の上に落ち添ふ涙いとどせきあへず

というのでした。口にはあまりお出しにならない方ですが、御様子でお悲しいことがよくうかがえるのです。女だつたらどんなに心が惹ひかれるかしのれない方だと思われました。私は少年時代から優雅な方だと心に沁しんで思われた方ですからね、現代の第一の権家はどこであつても、私はそのほうへ行きたくありませんで、大将の御庇護ひごにあずかるのを幸福に感じて今日まで来ました」

この話を聞いていて、高い見識を備えたというのでもないこうした人さえ薫かおるのすぐれたところは見知つているのであると浮舟は思った。

「それでも、光源氏と初めはお言われになったお父様の六条院の御容姿にはかなうまいと思うがねえ。まあ何にもせよ現在の世の中でほめたたえられる方というのは六条院の御子孫に限られますね。まず左大臣」

「そうです。御容貌がりっぱでおきれいで、いかにも重臣らしい貫禄かんろくがおありになりますよ。兵部卿ひょうぶきょうの宮は御美貌の点では最優秀な方だと思えますね。女だつたら私もあの

方の女房になる望みを持つことでしよう」

などと今の世間を多く知らぬ叔母おばを教えようとするように紀伊守きいのかみは言い続けた。浮舟の姫君はおかしくも聞き、身にしむ節ふしのあるのも覚え、語られた貴人たちも仮作の人物のような気がし、しまいには自身までも小説の中の一人ではないかと思われるのであった。宇治の話によって大將が今も自分の死をいたんでいることを知り、悲しみのわく心にはまた、まして母はどれほど思い乱れていることであろうと推理して想像することもできたが、かえって哀れな尼になっている自分の姿を見せては悲しみを増させることとなろうと思つた。

紀伊守から頼まれた女装束に使う材料を尼君が手もとで染めさせたりなどしているのを見ては不思議なことにあうように浮舟は思われるのであるが、自身がその人であつたなどとは言いだせなかつた。

裁縫たちぬいをしていた女房の一人が、

「これはいかがでございますか。あなた様はきれいに端がお縫よれになりますから」

と言つて小桂こうちぎにつける単衣ひとえの生地を持つて来た時、悲しいような気になつた姫君は、気分が悪いからと言つて手にも触れずに横になつてしまった。尼君は急ぎの仕事も打ちや

つて、どんなふうからだに身体が悪くなったのかと心配してそばへ寄つて来た。紅あかい単衣の生地の上に、桜色の厚織物を仮かに重ねて見せ、

「姫君にはこんなのをお着せしたいのに、情けない墨染めの姿におなりになって」と言う女房があつた。

あま衣あまぎ変はれる身にやありし世のかたみの袖そでをかけて忍ばん

と浮舟の姫君は書き、行くえの知れぬことになって人々を悲しませた自分の噂はいつか伝わつて来ることであろうから、真実のことを尼君のさとる日になって、憎いほどにも隠し続けたと自分を思うかもしれないと知つた心から、

「昔のことは皆忘れていましたけれど、こうしたお仕立て物などをなさいますのを見ますとなんだか悲しい気になるのですよ」

とおおように尼君へ言つた。

「どんなになつておいでになつても、昔のことはいろいろ恋しくお思い出しになるに違いないのに、今になつてもそうした話を聞かせてくださらないのが恨めしくてなりませんよ。」

この家ではこんな普通の衣服の色の取り合わせをしたりすることが長くなかったのですから、品のないものにしかでき上がらないでね、死んだ人が生きておればと、そんなことを思い出しています。あなたにもそうしてお世話をなさいました方がいらっしやるのですか。私のように死なせてしまった娘さえも、どんな所へ行っているのだろう、どの世界とただけでも聞きたいとばかりし思われるのですからね、御両親は行くえのわからなくなつたあなたをどんなに恋しく思つておいでになるかしれませんね」

「あの時まで両親の一人だけはおりました。あれからのち死んでしまったかもしれません」  
こう言ううちに涙の落ちてくるのを紛らして、浮舟は、

「思い出しましてはかえって苦しくばかりなるものですから、お話ができなかつたのでござりますよ。少しの隔て心もあなたにお持ちしておりません」

と簡単に言うのであつた。

薫は一周忌の仏事を営み、はかない結末になつたものであると浮舟を悲しんだ。あの常陸守の子で仕官していたのは蔵人にしてやり、自身の右近衛府の将監をも兼ねさせてやつた。まだ童形でいる者の中できれいな顔の子を手もとへ使おうと思つていた。

雨が降りなどしてしんみりとした夜に大将は中宮の御殿へまいつた。お居間にあま

り人のいない時で、親しくお話ができるのであった。

「ずっと引つ込みました山里に、以前から愛していた人を置いてございましたのを、人から何かと言われましたが、前生の因縁でこの人が好きになったのだ、だれも心の惹かれる相手というものはそうした約束事になっているのだからと、非難を恐れもしませんでした、亡くしてしまいました、これも悲しい名のついた所のせいであろうと、土地に好意が持たれなくなりましてからは久しく出かけることもいたしませんでしたが、ひさびさ先日ほかの用もあつてまいりまして、この家は人生のはかなさをいろいろにして私へ思い知らせ、仏道へ深く私を導こうとされる聖が私のためにことさらこしらえておかれた場所であつたと気がついて帰りました」

薫のこの言葉から中宮は僧都の話をお思い出しになり、かわいそうに思召して、

「そのお家には目に見えぬこわいものが住んでいるのではありませんか。どんなふうでその方は亡くなりましたか」

とお尋ねになつたのを、二人までも恋人の死んだことを知っておいでになって、幽鬼のせいと思召してのお言葉であろうと大将は解釈した。

「そんなこともございましょう。そうした人けのまれな所には必ず悪いものが来て住みつ

きますから。それに亡くなりようも普通ではございませんでした」

薫はくわしく申し上げることはしなかった。こうして隠そうとしている話に触れてゆくのはよろしくないし、事実を自分に知られたと思うのはいたましいと思召されて、兵部卿の宮が憂悶ゆうもんしておいでになり、そのころ病気にもおなりになったこともお思いになつては、宮の心情も哀れにお思われになり、いずれにしても口の出されぬ人のことであるとして、話そうとあそばしたこともおやめになつた。中宮は小宰相にそつと、

「大将があの人のことを今も恋しいふうに話したからかわいそうで、私はあの話をしてしまふところだつたけれど、確かにそれときめても言えないことでもあつたから、気がひけて言うことができなかつた。あなたは僧都にいろいろ質問もして聞いていたのだから、恥に感じさせるようなことは言わずに、こんなことがあつたとほかの話のついでに僧都の言つたことを話してあげなさいね」

とお言いになつた。

「宮様でさえお言いくく思召すことを他人の私がそれをお話し申し上げますことは」  
小宰相はこう申すのであつたが、

「それはまたそれでいいのよ。私にはまた気の毒で言いくくいわけもあつてね」

これは兵部卿の宮がかかわりを持つておいでになるために仰せられるのであろうと小宰相はさとつた。

小宰相の部屋へやへ寄つて、世間話などをする薫かおるに、その人は僧都の話告げた。意外千萬な、珍しい話を聞いて驚かぬはずはない。中宮が宇治の家のことをお尋ねになったのも、この話をしようとおそばすお心だつたらしい。なぜ御自身で語つてくださらなかつたのであろうと思われて恨めしかつたが、自身もあの人の死の真相を初めから聞かされなかつたために、知つてからも疑いが解けないで人に自殺したなどとは言わなかつた。かえつて他へは真実のことが洩もれているのであろう、当事者どうしで秘密にしようと思つても知れてしまわない世の中ではないのであるからと思ひ続け、小宰相にも自殺する目的のあつた人だつたとは言いだすことにまだ口重い気がして薫はならない。

「まだ今日さえ不審の晴れない人のことに似た話ですね。それで、その人はまだ生きていますか」

と言うと、

「あの僧都が山から出ました日に尼になすつたそうです。重くわずらつています間にも、人が皆惜しんで尼にはさせなかつたのでありましたが、その人自身がぜひそうなりたいと

言つてなつてしまつたと僧都はお言いになりました」

小宰相はこう答えた。

場所も宇治であり、そのころのことを考えてみれば皆符合することばかりであるために、どうすればもつとくわしく聞くことができるであろう、自分自身が一所懸命になつてその人を捜し求めるのも、人から單純過ぎた男と見られるであろう。またあの宮のお耳にはいることがあれば必ず捨ててはお置きにならずお近づきになり、いったんはいつた仏の御弟<sup>みでし</sup>の子の道も妨げておしまいになることであろう、もうすでに宮は知つておいでになつて、その話を大将へくわしくはあそばさぬようにと頼んでお置きになつたために、こうした珍しい話がお耳にはいつていながら、御自身では中宮が言つてくださらなかつたのかもしれぬ。宮がまだあの關係を続けようとしておいでになるのであれば、どんなにあの人を愛していても、自分はもうあの時のまま死んだ人と思うことにしてしまおう、生死の線が隔てた二人と思ひ、いつかは黄色の泉のほとりで風の吹き寄せるままに逢うことがあるかもしれぬのを待とう、愛人として取り返すために心をつかうことはしないほうがよからうなどと煩悶<sup>はんもん</sup>する大将であつた。

やはりその話に触れようとあそばさないであろうかと思われるのであつたが、中宮の思

召すところが知りたくて、機会を作って薫はお話しまいった。

「突然死なせてしまったと私の思っていました人が漂泊さすらってこの世にまだおりますような話を聞かされました。そんなことがあるはずはないと思われますものの、また自殺などの決行できる強い性質ではなかったことを考えますと、その話のように人に助けられておりますのが性格に似合わしいことのようにも思われるのでございます」

と言い、その話を以前よりも細かに申し上げ、兵部卿ひょうぶぎょうの宮のことを、尊敬を払うふうで、お恨み申しているようには申さずお話をして、

「拾われて生きていますことがあの方のお耳にはいつているのでございましたら、私が女を疑って見る能力の欠けた愚か者に見えることとございますから、なお生きていますとも知らぬふうにしてそのまま置こうかとも思います」

と申すのであった。

「僧都が宇治の話をした晩はね、こわいような気のする晩でしたからね、くわしくは聞かなかつたあのことですね。兵部卿の宮が知っておいでになるはずは絶対にありません。何とも批評のしようのない性質だと私もよく歎息させられる方なのだから、ましてその話を聞かせてはめんどうをお起こしになるでしょう。恋愛問題では軽薄な多情男だとばかり言

われておいでになる方だから、私は悲しんでいます」

中宮はこう仰せになった。聡明そうめいな方であるから人が夜話にしたことではあっても、必ずしもほかへお洩らしになることはなからうと薫は思った。

住んでいる家は小野のどこにあるのである。どんなふう<sup>に</sup>に世間体を作つてあの人にまた逢おう、何よりも僧都にまず逢つてみてくわしいことをともかくも知つておく必要があると薫は明け暮れこのことをばかり思い悩んだ。

毎月八の日には必ず何かの仏事を行なう習慣になつていて、薬師仏の供養をその時にすることもあるので叡山えいざんへも時々行く大将であつたから、その帰りに横川よかわへ寄ろうと思ひ、浮舟の異父弟をも供の中へ入れて行つた。母とか弟とかそうした人たちにさえすぐには知らずことをすまい、その場の都合で今日すぐに尼の家を訪ねることになるかもしれぬ。夢のような再会を遂げるその時に、俗縁の親しみを覚えさせるのがよいかもしれぬと思つたのかもしれない。その人とわかつたあとでも、異様な尼たちのいる所へ行き、予期せぬ事実などの聞かされることがあつては悲しいであろうなどと、行く途中でも薫はいろいろ煩悶はんもんをしたそうである。





## 青空文庫情報

底本：「全訳源氏物語 下巻」角川文庫、角川書店

1972（昭和47）年2月25日改版初版発行

1995（平成7）年5月30日40版発行

※このファイルは、古典総合研究所 (<http://www.genji.co.jp/>) で入力されたものを、青空文庫形式にあらためて作成しました。

※校正には2002（平成14）年4月10日4版を使用しました。

入力：上田英代

校正：砂場清隆

2004年8月26日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 源氏物語

## 手習

2020年 7月18日 初版

### 奥 付

発行 青空文庫

著者 紫式部

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>